出頭沒頭して暗に煽動使嗾する宮中密偵の活動はサルタンの專政復活に其歩を進め、內閣の交迭に青年黨の迫害に暴動兵士の大赦に刻々舊政に立歸らんとするの秋に當り、幸にも土耳其クロンウエルの出で、突差武力を以て首都を閉み、國會の決議を以てハミッドを廢して現サルタンを擁し、妖氣を一掃し、再び新政の基礎を旣倒に回すを得たり、此人を誰とか爲す、當時の第三軍團長にして今の陸相たるマームード、セフケット、其人なり。

ハミッドの廢位と土耳其のクロンウエル

セフケットが報を聞きて直に蹶起し、先づ部下の第三軍團を堅め、第二軍團の向背をも定め、又ブルガリヤ人其他の義勇兵を拉し、後顧の患を絶つの布置を了し、一半は鐵道に依り、一半は水路を取り、月の十八日に於て先鋒旣に首都の郊外に屯し、次て大軍至り、スタンブルを取り、ペラを略し、廿三日にはイルヂス宮を包圍し、廿七日には國會を召集して滿場一致新サルタン、マームード五世を擁立し、ハミッドの廢位を決議し、同夕九時國民の代表者たる二名の代議士は國論の結果を齎らし、第三軍團の第一師團長ハスニー、パシャ、巴里大使館附武官たるフエチ少佐と共にチルヂス宮中に參內して前サルタンに國論の在る所を上奏し直にサロニカに退隱せらるべきを迫り、流石のサルタンも大勢如何ともすべからず、夜半暗に乘じ三皇后、四侍妾、二皇子、五侍婢、四宦官、九使丁を從へ、マセドニヤ軍警護の下に悄々スタンブルに成らせられ、同處より汽車の人となり、廿八日の夜十時には左しもの專制君主ハミッド帝もサロニカ港頭に孺居の身となる、セフケット將軍の兵を率いて首都に入りしより僅かに四日間にして萬事を了す、彼が神謀鬼算驚嘆の外なし、其初め暴動蜂起して新政を顚覆せんとするや、上下之に雷同し、

廟堂の諸公も多く兩端を持し、軍隊の多くも前サルタンに同情し、新紙の多數も暴動を迎ふ、此時に當り何の信ずる所ありてか獨り敢然として起ち疾風の如く來つて首都を占領し、大事を決行す、例令ひ武力を擁すと云ふと雖も、機を看て動き、信じて疑はず、以て大勢を轉回し、新政の生命を復活せしめしのみならず、進んで禍根を一掃したるの手際に至りては土耳其のクロンウエルと云ふも必ずしも過賞ならざるべし、セフケット亦人なり、陸相となりてより多少專斷の譏を免かれざるも、彼の方針や大體に於て可なり、而して此際の手際に至つては大に賞めてやつて良し。

ハミッド帝都落の幕

左るにてもサルタン、アブヅル、ハミッド廢位に次ぐにサロニカ落ちの幕に至りては正に一齣の大悲劇にして、當時の狀況は之を目擊者に聽き、又二三の新著に依つて仔細に覗ひ知ることを得たるも、茲に之を敘せんには餘りに長物語なり。

ハミッド都落の後、イルヂス宮裏を檢するに、現金四十八萬リーラ（一リーラは我八圓六十四錢）物品を價格に見積りて約百八十萬リーラ此外に土地、畠、鑛山、家屋等の不動產多く、鑛山の收入のみにても年に三十萬乃至三十五萬リーラに上り、千五百件以上の畠地、二十五萬ニーカーの山林其他前記の家屋等の全收入を合せば年收二千八百萬法に達するならんと云ふ、ハミッドの預金せし銀行は國立銀行、里昂銀行、ポットマン銀行、獨逸銀行等にして、其額百十二萬リーラ內外なりしと後にて知られたり、新政府は其性質の國有とすべきものは之を國有とし、皇室の私有とすべきは之を帝室有とし、ハミッド廢帝には月額千リーラ即ち八百六十四圓の費を給し、其二皇子に月額六百リーラを支給するとしたるが如し、ハミッドは由來多藝多能の人、宮中に於ける劇場の如き

工作場の如き、總て彼れの設計に成りしもの、就中一般の最大興味を惹きしは三十二年の治政を一貫せる密偵政治に關する報告書類なり、此等の書類は今や陸軍省構内の一棟に山積せられ、數千の書箱は十人の士官と二人の代議士より成る調査委員の手に委せらる、若し之を公にせんか、伏魔殿裏魍魎魍魎跳梁の狀況手に取るが如く判明せんも、其關はる所餘りに廣きを以て、一切秘密に附する筈なりと聞く、此れ賢き政策なり、新政府は大に清濁併呑主義ならざるべからず、小異を以て大同の大計を誤るべからざるに於て過去の罪は之を看過して可なり。

ハミッド廢帝年正に七十歲、サロニカの謫所に在りて日夕爲す所は何事なるや、過般重病との報四方に傳はりたるも軍醫の診察に依り其虛報なりしを明にせり、廢帝幸に長く健在にして自國の復興を祈れ。

ハッキー内閣と議會

サルタンの更位に一段落を爲したる新政府は昨年末にいたり三たび目に宰相を代へ今のハッキー、バシャ駐伊大使より入つて宰相となりセフケット、バシャ陸相となり、ハッキー、セフケット聯立内閣を組織せり。

去十二月三日はハッキーが下院に於て施政の大演說を爲すの日なりしを以て之を傍聽せんとて馬車をボスホラスに面せる假議事堂に馳れり、議會は最初は前述せる如くスタンブルなるソフヰヤ禮拜堂側に在りしが一時チラカン、セライ離宮に移り、本年一月火災に罹りハミッドの廢位後空虛となり居るイルヂス宮にて開會せしが、現に陸相官舍を引上げて假會堂となせるなり、豫て則を通じ置きたる爲め先づ外務大臣リファード、バシャに會し、其斡旋にて傍聽の一席を領し得たるも傍聽人既に定數を越へ、議席にも空位なく、前の共同進步協會の主領たりしアーメド、リザ白爵を捻りつゝ議長席に控へ、皇族席には二三皇子

の軍裝にて前面のロージに控へらるゝあり、土耳其のクロンウエルも亦海相と隣り演壇下の椅子に凭り、丁度宰相ハッキーの演說中なりしも何の事やら少しも明かならず、議員の總數二百七十、其中約百六十人は共同進步黨即ち青年黨員にして政府黨たり、他にリベラル黨約三十人首領チフヰク、ベイは曾て青年黨に屬せしものデモクラット十八人、其他は無所屬なり、ブルガリヤ、ボスニヤ、セルビヤの諸國會と異なり、基督敎徒もマホメダン同樣赤の帽子を戴けるを以て目をもて之を區別し難きも、後にて聞くにアルメニヤ人十二、希臘人二十四、ブルガリヤ人五、ワラチヤ人一にして同じマホメダンにてもアラビヤ人は六十五名に及べり、僧侶が割合に多きは赤帽を包むに白又は綠色の布を以てせるもの多きに依りて知られ一人の軍裝せる者を見たり、白髮の人意外に少きは青年黨の多數を示す反證ならんか。

翌日の新聞を讀むに宰相の演說はアルバニヤ問題、ルーメリヤ武器沒收事件等の內治問題を說明したる後、外國の關係も良好なるを告白し軍備の整頓は國家存立の必要條件なるを以て、爲めに歲入歲出の不平均を來たすも已むを得ざる所なるを告げ、同時に敎育の普及、產業の開發等に全力を盡くすべきを述べたるものなり、之に對する反對黨の攻擊は五日の月曜日にも八日の木曜にも盛んに起り、宰相は木曜の午後に於て約五時間に亘る大演說を試みて之が辯護を爲せり。

現內閣の一部に對する攻擊は曾に反對黨のみならず青年黨の一部（約三十人）にもあり、內閣更迭の噂さは既に久しき以前より傳へられ、本邦にも夙に知れ渡れることならんが餘り反對激しくなりては青年黨議員も起つて之を擁護せざるべからず、ハッキー倒るゝも續て立つものは矢張青年黨員なりとせば、內閣の更迭餘り頻繁なるは彼等の不得策とする所なるべく、結局一二大臣を更迭せしむるに止めんかとの觀察が正鵠を得たるものなるべし。

反對黨は或はキャミルの再起を希望し、セイドの再起を希望するならんも、此等の元老輩は到底現土耳其に不適當なり、余は青年土耳其黨が能く隱忍して興盛を恢復し政權を持續せんことを熱望す、少くも國の統一の基礎確立する迄は彼等の手にて料理せんことを希望す。

土耳其新政府の方針

察するに土耳其新政府の方針は國權維持國家統一の爲め陸海軍備を擴張し、强兵の實を擧げんとするに在るが如し、而して其强兵主義たるや、攻擊的に非らずして防禦的に在るが如し、ハッキーの國會に於ける施政演說にも軍備擴張の必要にして之が爲め歲出の缺陷を生じ國債に依り之を補塡せざるべからざるに至るも亦已むを得ざる所なりしと云ひ、今クロンウェルも曾て人に語つて曰く、土耳其の現狀は事々物々改革を要す、各省は其れぞれ其所管事務に就き必要の改革を爲しつゝあり、故に余は余の所管事務に就て之が改革を試みんとす、余の所管は軍事に關するも、文明各國は何等危惧を懷かざらんことを望む、今日の歐羅巴は平和を要し流血を忌む、而も文明世界の平和を愛するに拘はらず、不幸にも戰爭の歐洲に起るありしと假定せんか、そは東よりの閃光に依り點火せらるゝならん、今若し土耳其にして富强とならんか、東よりの閃光なかるべし、强土は平和を意味し、弱土は苟もすれば之を破るべし、余がオットマン陸軍を改革するに全力を盡くしつゝあるは此禍根を絕たんが爲めなりと、此れやがて新政府の方針を語るものにして百年來事每に其領土を失ひ、常に基督敎强國の迫害を受け來りたるオットマン帝國の新政府が先づ現狀を維持し、現政を永續せしむるに足るの軍備を整ふるを第一要件とせるは至當なり、彼等は失ひたる領土を奪還せんとするに在らず、現に有する所を失はざらんとするに在り、攻擊的に非らずして防禦的なり、余一日君府の外國記者協會に於

て會長佛國海軍大佐クルフ男其他の重なる記者と會し其の云ふ所を明くに多くは青年黨政府の突飛なるを笑ひ、整理の頭腦なく產業奬勵の方針に出でずして、徒に武力の擴張に腐心するを嘲れり、此觀察は獨り此徒のみならず、多數外人の然か思ふ所なるべし、試みに本年豫算案を見るに歲出三千五百萬リーラ、即ち三億二百四十萬圓、歲入二千八百六十萬リーラ、即ち二億四千百三十九萬四千圓、內陸軍費九百萬、海軍費百四十五萬、合せて千四十萬リーラ、即ち八千九百八十五萬六千圓にして總歲出の約三割弱を占め、パブリック、ウォークス事務省の百十六萬リーラ、文部省の九十一萬二千リーラ等に比し、軍費の頗る巨額に上れるは事實なり、然れども土耳其の狀況は先づ軍備の整頓を必要とし殊に內外憂患の渦中に在りて、新政を敢行せんとする新政府に在りては自己の手中に武力をにぎるを以て唯一成功の途なりとするに於て、新政府の方針や斷々として之を以て進むべし、然れども、軍備の整頓と同

時に勿論富國の策を講せざるべからず、斯くて新政府の頭上に落つる最大問題は財政に在り、土耳其の財政が比年著しき悲境に陷り來りたる餘波を受け事に改革に從ふ、財政の整理や軍備以上の難問題なり、先づ稅法を整理し行政を整理して積極消極兩方面より歲入を增加し歲出を緊縮するを要す、商工業を奬勵發達せしめん爲め交通機關の完成を要し土地所有權の確定を要す、敎育の急務なる亦言ふを待たず、而も從來何等統一的方針なく、各人種互に國是に反するの敎育をほどこし、國勢をして日に衰頹に瀕せしめ來りたるに於て今後は憲法の命ずる所に依り平等に然も統一的に敎育を施さゞるべからず、宗敎の如何を問はず各種族に法律上の同權を享有せしめ官權を同等に分配せざるべからず、一般に兵役の義務を負擔せしめざるべからず、司法權をセリアート(回敎法律)より獨立せしめざるべからず、進んでは治外法權の撤去をも成就せざるべからず、曰く何、曰く何と算へ來れば事々物々改良

進歩を要するや固よりなり、新政府は此等の一を成すにも中々の困難なり、況んや總てを成さゞるべからざるに於て任重くして道遠きの感なきに非ざるべし、宜しく武力を後にし反動を防ぎ、急がず躁かず徐々に改革を加ふるの外なし、新政府者之に悟る所あり大多數なる迷信的マホメダンの反感を買はず、又國内各種族をも平等に取扱ひ、而して外列國とも良關係に立たんと欲するが如く、既に二年間に多くを爲せり、陸軍は獨將ゴルッ理想の新組織を爲すことに決定し、本年秋の大演習を參觀せし余の友人は其整頓せるに驚きたりと云へり、海軍も新に戰艦を購入して武力を加へ、基督教徒に兵役の義務を賦課することも決行せられ、現内閣員中の三人は非回教徒にして即ち藏相は猶太人種、農務大臣は希臘人、商務大臣はアルメニヤ人と云ふが如く政權を廣く有能の士に分與し、教育に勸業に漸次其歩を進めつゝあり、今の土耳其を料理する者策此に出でざるべからず、余は多數の誹謗者あるに拘はらず新政府の政策を是なりとするものなり。

コーランの近世化

然かも此邦の將來を揣摩するに當り最大問題の横はるあり、コーランの近世化と否との問題是なり、コーランを近世化し、マホメダンの多數之に準由するに至らば土耳其も萬歳なりと云ふ可し、青年黨の識者能く之を知る、故に憲法を復活するもハミッドを廢するも將た革命の旗を翻すも、コーランの命ずる所に從ひ之を決行すと稱す、而も守舊の徒は固より一にもコーラン二にもコーランなり、昨年四月の暴動はコーラン聖典に依り、セリアートの命ずる所に從ふと稱して青年黨を迫害し、新政を顚覆せんと企てたり、老猾ハミッド固より然り、彼の一昨冬憲法復活を餘儀なくせらるゝや、コーランに誓ひしは余の既述せし所、斯くて、新も之を用い、舊も之を用ゆるも如何せん國民の大多數は憲政に

無關係にして苟もすれば舊に泥み新を排せんとす、青年黨苦心の存する所は正しく此に在るべし、支那の康有爲曾て黄宗羲顧炎武等の餘流を汲み、別に一家の言を立て孔子改制考、新學僞經考等の書を著はし、中土の政治法律の西歐の自由民權と必ずしも支吾せざることを說けり、土の青年黨はコーラン聖典は宗教の如何を問はず、人民一般に同權を與ふるを許すと云ひ、カリフにして獨夫たらばセリアートの命ずる所に依り之を廢するも可なりと云ひ、以てコーランの近世化を主張しつゝあり、コーランの近世化的解釋は必ずしも難事ならざるべし、唯最難なるは近世化のコーランを大多數のマホメダンに信ぜしむるの點に在り、此點に於て土耳其も一英傑漢の出てゝ新コーランを提唱し衆愚を隨喜せしむるの必要に迫れるが如し、今や何れの國にも英雄の出現を必要とする時代なり。

元老セイド、パシヤ

國の元老として存するものゝキャミル、セイドの二人者あり、キャミルは本年二月沒落後君府を去つて今や埃及に客寓せり、由來英人に好く、青年黨の彼を倒すや、英人は多少の惡感を抱きタイムスの如きも反對の論鋒を向けたるが如し、現に彼の再起を望むものなきに非らず、最近彼に起たんことを慫慂したるも拒絶したりと傳へらる、セイドはキャミルより弱年なるも既に七回宰相の位に上り、現に上院の議長たり、一日事を駈つてシシリーに彼を訪ふ、歐風の建築なるも宏大と云ふには非らず、導かれて階上の一室に入るに一記者の何事か一心不亂に記しつゝあるを見る、グルフ男の彼は英語を解すと云へるを信じ、何とか談緒の開けるなるべしと考へ居たるに土耳其語アラビヤ語の外佛語を良くするのみと知れ、玄關番らしき者の少しく獨語を知るを之れ幸と其

通譯に依り數分の會話を交へたり、彼れ憲法復活當時宮中の狀況を語り頗る余の興趣を惹きたり、現宰相ハッキーの宅も彼の居を距る町餘に在り、ヒルミも亦此附近に住せるも、余の則を通じたる際には共に不在なりき、大臣には外相の外、農相、商相を共官衙に訪ひたるのみ、陵や配するに足るものなし、之に比し多少の興味を感じたるはアラビヤ選出議員ペハ、ベイとの會見なり。

アラビヤ議員

ホテル、グロッケルにて余の占領せし室の隣りにアラビヤのアレッポ選出一代議士あり、ペハ、ベイと呼び青年黨に屬し年猶壯、自國語を解するのみ、羅馬字すら知らず、其差出せし名則もアラビヤ語にて記しあり、一夕ホテル主人の通譯にて相會し相語ること約二時間に亘る、アラビヤ人と云ふも容貌は固より服裝に至る迄新式の流行を選び、歐人と異なるなく、頭上の赤帽がマホメダンたるを示すのみ、彼れ余の問に對し答ふること詳なり、曰く第一期議會は最初の議會たりしに加へ、失火、暴動等の出來事の爲め會期(四ヶ月)延長して八ヶ月となり、第二期も七ヶ月半を費し、一年の大半帝都に在りたり、第三期は去十一月十四日に始まりしが會期の延長を要するなるべし、議員の手當は一ヶ月五十リーラ(即四百三十二圓)にして往復の旅費は土地の遠近に依り別に支給せらる、アラビヤ選出議員は六十五人(中二十五名は青年黨)なるも實際アラビヤは未だ正確なる人口調査なき爲め、選出議員の割合少なし、余の概算に依ればアラビヤの人口は全國の約三分の一を占む、而して五萬人に一名の代議士を出す割なるを以て、人口調査成るの曉には選出議員の數は今より少くも二十名を增すべしと、彼は亦アラビヤの事情を述べ、ヘイジャ鐵道の完成は土地開發の大助たり、余の故郷たるアレッポより九百餘哩の南なるメジナ迄は既に開通し、メッカ迄貫通するも

近きに在り、アレッポより君府に至るには五日にて充分なり、ユーフラチス、チグリス流域の富饒は云はずもがな、獨人其他外人も漸次此方面に入込みつゝありと云ひ、余の問ひの終るや彼れ乃ち問を發して曰く、貴邦の富强は世界の驚嘆する所、我邦は貴國と同じく東方に位し、我國人は貴國を敬慕し、貴國に倣はんとする者聞く貴國には近來多くのイスラム信徒を生じ、東京には我宗派の新聞ありとは眞乎と、此問はボスニヤ議會にても余の受けし所、是に於て思ひ出すは君府在住邦人の餞なり、日露戰後サルタン一日君府唯一の本邦商店中村の主人を召され、侍從を經て下問せらるゝに、近頃佛字新聞の戯する所なりとて耳にせる所に依れば貴國はマホメット教を國教とせられしと、果して眞なるや否やと、主人は下問に對しこは何等の報導にも接せざれば明答は致し難きも此の如きことは國體上想像以外なりと答へて退出せしとの事なりマホメダンの徒の我を敬慕するは勝手たるも、我に多數の回教徒あることを信ぜしむるに至りては聊か考へ物なり、之を善導するは不可ならざるも惡用せんか其害測るべからず、將來の考究に値する問題なるべし、其よりペハ、ベイは朝鮮問題日米問題等にも問ひ及び中々物識りにてアラビヤ人なりとて決して馬鹿には出來ず、某國議員の一强よりも却て大勢に明かなりと思はしめたり。

外國人記者協會と土耳其新聞主筆

流石は東歐外交の中心とて此地には有數の外國人記者もあり、一協會を設け毎日正午相會して意見を交換し互に連絡を圖れるが如し、余は幸に某獨逸人より會長への紹介狀を有したるを以て、兩回彼等の集合時間を目掛けて訪問し種々聞く所ありたり、會長クルフ男は前にも述べし如く佛の海軍大佐たりし男にして三十年前と十五年前の二回日本に渡りしことありと云へり、英米人の列席者なく多くは墺獨、露佛等

の記者らしく露のノーヱ、ウレミヤ派出員、墺のノイヱ、フライヱ、プレッセの通信員等能く談ず、大抵は除り青年黨に望を掛かざるが如く冷評的態度を以て之を嘲れり、是れ彼等立場の然らしむる所なるべく、又マホメダン國に同情なきが爲めなるべし、余は密に思ふ、彼等は到底マホメダンを明解し同情する能はざるべし、唯我邦人のみ能く之を解し能く之に同情するを得んと。

君府には外人記者と同時に土地の記者も亦多く其數約四十、佛字英字混用のレバンド、ヘラルド、獨字のオスマニッシヱ、ロイド等二三の外字新聞を除き、土耳其語、アラビヤ語、アルメニヤ語、希臘語、西班牙、猶太語等の各新聞あり、土耳其に於ける新聞の勢力は頗る大に、大新聞の主筆は能く輿論を動かするに足る、新政府の建設は此等新聞記者と軍人に負ふ所多く、議會の有力なる議員にして曾て記者たりしもの多し、就中タンニンのジャヒッ、ベイ、イクダムのイサム、ベイ、サバーのケレキアン等最も有名なり、後二者には一會の機を得たり、ケレキアンはアルメニヤ人にして埃及に在る七年、齢既に五十其云ふ所頗る穩健に、土耳其は今や其同一致の時代なり、アルメニヤ人も其に土耳其の勃興に力めざるべからず、土耳其の前途は樂觀すべしと云へり。

ガラタ新橋橋畔の感

一日ガラタ高塔に登りて君府の全市を大觀し、遙に亞細亞の大陸を双眸に收め、下りて金角灣に架せるガラタの新橋橋畔に佇立して四望し四顧す、何時にても雜踏せるは此所なり、橋畔よりスタンブルを望み、ハイダル、パシヤを望み、スクタリーを望むの光景雄大なるは更にも言はず、橋の兩側灣頭に林立せる汽船、帆船、小舟は數百千を算へ、兵艦右側の入江に横はり、橋上の往來を見れば正しく萬國人種博覽會場に入りたるの感あり、赤帽の人、白布を以て包める人、黑奴あり、白人あり、日本人、タ

ルタール人、アラブ人、アルメニヤ人、希臘人等數十の人種を數分間に目擊するを得、橋側に一珈琲店あり、囲あらば則ちこれに就き一杯の珈琲に渇を醫しつゝ此人種博覽會を見物するを常とせり、高加索チフリスのバザールは稍之に類似の光景なきに非らざるも、君府の人夥しくして類多きに如かず、歸館して案内記を見るに曰く、君府の人口約百十萬中四十萬は純粹のマホメダンたる土耳其人、十六萬は希臘人、十五萬はアルメニヤ人(グレゴリー派)カトリック派アルメニヤ人六千五百、ブルガリヤ人四千三百、猶太人四萬五千、プロテスタント一千等にして外國人の數十三四萬なりとあり、サルタンの領域は三大洲に跨り、埃及、サイプラス等名のみの領地を除き、直接サルタンの治下に在る領土の面積二百九十八萬七千平方吉米突、人口二千四百萬、面積の割合に人口少きも、人種の數四十餘を算するはガラタ橋畔五分時の佇立にて一班を推すべく、若し夫れ君府に於ける代表的機關を數へんか、回教教主たるカリフの所在地たるは云はずもがな、セイク、ウル、イスラム在り、グリーク教アルメニヤ教各パトリアルヒあり、猶太教大ラビナーあり、回教の大「モッシュー」二百二十七、小「モッシュー」六百六十四、希臘オーソドックス教會堂六十、アルメニヤ教會堂三十八、アルメニヤ、カトリック教會堂十四、ブルガリヤ一、ブルガリヤ、カトリック一、羅馬カトリック二十六、プロテスタント五、シナゴーク(猶太教會堂を云ふ)四十一、學校の種類も萬別にして英米、獨、佛等各自國語の學校を有し、土耳其人の學校と合せて其大なるもの百八十八、土耳其小學校三百六十八、メドレッセ(回教學校)百七十七、公浴場百六十九、回教圖書館四十五、其冊數七萬部、更に家屋別を聞くに戸數約十七萬、中商戸約二萬二千なりと、此等は勿論正確の數を示さゝるも以て君府の世界的都市たるを示すの資料に供せしのみ

ソフヰヤ大禮拜堂下の感

ソフヰヤ大禮拜堂に入りて大建築の大規模を仰ぎイスラムの優勝を示せる遺跡を眉雪の老僧より聽取し、又遙かの此方より雲表に聳ゆる新月の尖塔を見ば、誰しも東羅馬帝國以來の歴史を想起せざるを得ざるべし、此建物はヂヤスチニアンの創めし所、想ひ起す千四百五十三年四月六日マホメット二世は二十萬の壯丁を率ひ、アドリヤノープルより進軍此都を包圍したるに當時の希臘皇帝コンスタンチン十一世は五千の希臘人と三千の以太利援兵とを提げ之に抗する五旬、遂に五月の二十三日に至りて衆寡敵せず、トプカプシ門に戰死するや、其首をソフヰヤ寺院前なるヂヤスチニアン記念柱の上に懸げ、マホメダンの勝兵全市を掠奪する三日、其額三百萬「デュカット」に上れりと稱せらる、捕虜亦六萬、就中最大悲劇はソフヰヤ寺院内の虐殺なり、亡國の民は最後の隱れ場を神聖なる此靈場に求め老弱男女麕集せしに無慈悲なるマホメダンは場内に到り男子を斃す三千、婦人小兒を虜とし、或は之を奴

隷とし或は之を賣飛ばしたるは史籍の記する所、斯くて尖塔の上に在りし十字架は撤せられて新月之に代り、爾來四百六十年、マホメダン二億八千萬の中央禮拜堂として今に嚴存す、而して土耳其の亡びざる限りマホメダンの亞細亞に退却せざる限り、エージヤ、ソフヰヤは永くイスラムの中心たるべきなり、ソフヰヤ寺院のマホメダンの有に歸せしより基督教國の之を奪還せんと欲せしもの夫れ幾何ぞ、東羅馬の相續者を以て自任する北方ツァールの國は固より希臘も亦然らん、某々國亦然らんげにソフヰヤの尖塔に再び十字架を掲げ、歐亞兩洲に跨るの形勝に依り四方に號令せんことは總ての國の英雄の欲する所にして此に踞するを得ば世界的帝國の基礎聊か成れりと云ふべく、雖しも欲する所はマホメダンの死守する所、ソフヰヤ禮拜堂下の感特に深きものあり、況んや一昨年十二月の國會も此堂前に開き、昨年四月の暴徒も其堂前に據る、ソフヰヤは此國の運命と終始するもの、感更に深からざ

るを得ず。

舟を金角灣に浮ぶ

獨りソフヰヤのみならず回顧の跡は到る處に在り、デヤスチニアンの宮殿、プコレオン宮、オーガスツームにヒポドロム、何ぞ其れ行客をして感慨せしむるの種滋き、如かず興亡を煙波に附し呂尙に擬して海中に釣せんにはと、快晴の一日在住同胞某君、君府在住の邦人は軍人一、商人三、計四名なり)と共にガラタ橋畔より小舟に浮び、衞くが如き兩岸の光景に醉ひつゝ、灣内深く進むに漁船無數にして尺餘の鰹片々として舟中に落つるを見る舟夫に質すに十一月乃至一月は鰹漁の時期にして、一日平均百疋を獲べく、一疋の市價二ピアスター半(即ち約二十四錢)なりと、鯖も亦多く、好商賣なりと云ふ可し、既にして海軍鎭守府の前に至る、大小軍艦十數隻あり、英の提督ガムブルは此國海軍改良の教師たるを、

獨逸ゴルッの陸師に於けるが如し、現に英國に留學せる士の海軍士官廿餘名、土艦に在る英國大尉の月給六十磅なりと、而も船側に海草の附着せる多きは久しく灣内に泰然自若たるの證か呵々。

金角灣の盡くる所河流之に注ぐ、樹林繁生し家屋點綴して頗る幽景なり、ボスホラス海峽の遊行は更に一倍の好光景なるも、先年オデッサより君府に至るに際し仔細に兩岸の風光を賞したることあるを以て今回は之を止め、一友と對岸のハイダルパシャに至り、七ケ月振りに亞細亞大陸を踏みて故郷に歸りたるの感を起せしと同時に、自己の休憩せる建物がアナトリヤ鐵道の終點たる停車場にして、二百萬圓を投じて新に成れるものにして獨人の經營する所、正に南滿洲鐵道の大連驛に當るとの友の談に今更ながら獨人の膽大にして眼炬なるを思ひ、折角の遊興も半ば削かれ夕陽を浴びて歸りぬ。

獨人の勢力と佛語の勢力

序に土耳其に於ける外國關係に言及したるも仔細に之を叙するの際なく又材料に乏し、唯茲に一言を欲するは獨人の勢力がハイダル、パシヤ新停車場同樣頗る優勢なることなり、七年前曾遊當時に在つては埃露の二國が最も多くの容喙權を有し、歐土の現狀は兩國の政策に依り維持せらるゝの感あり、今日と雖も兩國は近東外交の大立者たるには相違なきも、卅七八年戰後の露は內未だ全く其勢力を恢復する能はず外近東に對しても鼎の輕重を問はるゝの嫌なからず、埃は老國、獨の强援に依り始めて活動を得るのみ、而して大英國は寂として聞ゆるなく、獨のみ獨り大に熾んなるを見る、獨の外交は由來宮廷外交にしてハミッド懷柔策なりし、ハミッド倒れて後の今日聊か手持無沙汰なるべき筈なるに中々左樣に非らず、陸軍の改革を一手に引受くるのみならず、

近く九千六百萬圓の公債をも重に自國にて募集せしめて佛英の鼻を明かし、小亞細亞の經營も一旦は頓挫せしも、英露の波斯に於ける活動はカイゼルを驅つて其經營を急がしむるや必せり、過般滑稽にもマホメダン(主に波斯人)の徒が君府に大會を催ふして英露の波斯に於ける横暴を訴へ、カイゼルの保護を仰くの電報を伯林に發せしことあり、以て一笑に附すべきも獨逸の勢力は然く漸く大ならんとす。

然し土耳其のみならず、向加利以南の諸邦に入りて著しく感ずるは、佛語の一般に行はれ、佛貨の信用厚く、佛國的感化の深きこと是なり、蘭にベルグラットを去るに際しホテルの者曰く、停車場にてセルビヤの紙幣は之を取らず佛貨最も可なりと、自國の鐵道に於て自國の紙幣を採用せざるは如何に其國の信用薄きかを證すると共に、佛貨の勢力に驚きたり、佛貨は巴幹一帶東歐の通貨なり、而して此等地方人士の外人との通用語は英語に非らず獨語に非らずして佛語なり、ホテルのメニュ

ー、汽艇、汽車、料理店のメニューが佛語なるが如く、諸掲示の如き第一に佛語を大書し、官廳に於ける第二の公用語は佛語なり、土人は何國の語を解せざるも大抵佛國を解す、佛人的感化は久しく近東の上下に侵潤せる所、近東諸國の權者は重に佛國にして、佛貨の信用範圍頗る大なるには今更ならざるも一態を新にせし所なるが、其勢力たるや社會的にして獨人勢力の如く國家的ならず、知らず何れが可なる、左るにても英の死せるが如く沈默せるは人をして嗚呼老大國の歎を發せしむ。

獨人の志

獨人の優勢なる前途の如きも獨人亦一大缺點あり、そは被同化力の大なるに在り、次に示す一例も之を證するものと云はゞ云ふべきも、余の取る所は彼等の志に在り、遠征の地出稼の鄉を以て直に埋骨の所となすの深き決心に在り。

一日友人中村君に伴はれ、町外れにプロテスタント派の墓地に展す、此裏には君が最愛の妻子が不幸此地に於て客死し茲に永眠せるなり、墓前に一掬の涙を灑きたる後境内の一隅に到る、新墓二あり、其に獨人の墓にして一は獨逸陸軍大尉土國少佐某の墓とあり、土軍に傭聘せられ居たる獨逸青年士官のものと知らる、其前に約一坪半の草地あり、四個の石標圍らすに鐵條を以てして境を劃す、而も埋棺しあるとも覺へず、怪んで墓守に聞いて始めて合點せり、曰く、そは新に君府に來りし一獨逸商人が着後先づ所持の幾分を割きて終焉の地を茲に相したるものにして、僅かに一二ヶ月前の事なりと、此志を以て海外に赴く何ぞ成功の伴はざるあらん、獨人遂に侮る可からず。

セラムリック

セラムリックは毎金曜日に於けるサルタンが宮外の禮拜堂に參拜せ

らるゝ盛式にして、君府に一遊せんものは必ず見落さゞる所なるも、先年の遊には之を見るの機を逸せしを以て、今回はと思ひ、十二月二日の金曜日正午ドルマバクチ宮前に到る、衛兵既に宮門より禮拜堂前數町の兩側に整列して往來の人を止め、環睹の者途に塡充す、正午を過ぐる十分新サルタンは一隊の近衛騎兵に前後を擁せられセイク、ウル、イスラム及侍從長等を隨へて過ぐる所、兵士捧げ銃を爲しパチシャー萬歳を一聲に唱へ、サルタンは輕く擧手の禮を施し又余等外客を望見して一々排せらる、其式頗る壯觀なり、然し改革後此等の儀式も極めて簡單となり復た昔日の盛典を見るべからずなりしと、昨年四月二十三日前サルタン、ハミッドがセラムリックの式に臨まるゝや今クロンウエルの兵は正に君府を包圍し了せるの時なりき、此時を最後として、ハミッドは再びカリフたるを得ざるなり、パチシャーたるを得ざるなり、當時を追想せば此日の盛式も何となく濕りて見ゆ。

土耳其の參宮鐵道

ハミッド廢帝の話の序に思ひ出づるは彼がカリフ時代に於て發起せられ今や殆んど全通せし土耳其の參宮鐵道なり、ダマスカスよりメヂナを經てメッカに達する千百十六哩の所謂ヘイジャ鐵道の事なり、此鐵道の布設には二大目的あり、教主マホメットの女ファチヤの墓の在るダマスカス、マホメットの死所メヂナ及マホメットの生地メッカの三靈場を通じ、二億八千の回民をして參宮し易からしめ、以てカリフの勢力を示しマホメダンの統一に資せんとするもの其一にして、他はアラビヤと小亞細亞とを連絡し以て國防の統一に便せんとするもの其二なり。

斯くてハミッドは一念發起し、去る明治三十三年四月に之を公表し、其目的の回教三靈地を相連ぬるに在るを以て廣く世界に散在せる回教

徒の義捐を求め自分も第一番に五萬リーラを捐して範を垂れ、土耳其の官吏はマホメダンたると非マホメダンたるとを問はず、一ケ月の俸給額を寄附せしむることゝし、又趣意書を印刷して之を四方に配附し、斯くして集まりたるもの三百萬リーラ、即ち二千五百九十餘萬圓に達し、サルタンの即位二十五年記念祭の年たる同年八月末には既に工事に着手し、漸く南して沙漠若しくは高原等に近づき工事困難なるに及びては兵隊を使用し一方には鐵道隊を新に訓練して之に向はしめたれば、工事意外に早く進捗し、昨年八月にはメヂナに達し、メッカ迄餘す所二百八十哩に過ぎざるに至れり、然るに去千九百七年末迄に工事費として既に二百七十五萬リーラを消費し、餘す所二十五萬リーラに過ぎず、次て革命ありハミッドの倒るゝあり、其後は工事頓挫し昨年八月末迄に完成すべき筈のもの今日に至るも猶完成に至らずと雖も、遠からずして完成を見るべし、是れハミッド三十二年の治政間にカリフの勢力を善用したる一例にして、メヂナ停車場の大建築は一信徒の爲せる一百萬法の寄附に依りて成れるものなりと云ふに至りては、カリフの勢力の大なるを想像するの一助にもと茲に之を附記することゝせり。

メヂナよりの豫定は二線に分岐してメッカに達し、メッカより更に紅海のジダー港に延長するの計畫なり、此未定線にして成り又一方ダマスカスの北は既にアレッポに達せるを以て之をコニヤ線と接續せしめば君府より坐してマホメットの靈地に參拜するを得るは勿論支那、印度、中央亞細亞、埃及、アルゼリヤ、チユニス、モロッコ、波斯各國のマホメダンが爲めに便利を得る幾何ぞ、又北亞非利加の回教徒と連絡を便にするを得る幾何ぞ。

再遊の土耳其は一先づ筆を茲に擱き其詳に亘りては重ねて記述するの機を他日に待たん。

君士坦丁堡港外

亞水歐山眼底收　不知雄志何時酬
悠然凭欄回頭處　一抹莽烟包兩洲

埃及

一月四日カイロより

亞歷山港＝カイロの一週日＝冬の天國＝ピラミッド＝市內外の古蹟＝博物館と圖書館＝アヅハルと埃及兩大學＝向學の新氣運＝國家的精神の勃興＝流石は英國＝埃及の獨立熱＝國民黨の主張＝國民黨の創立者＝前首相の橫死＝高等學生倶樂部＝溫和說の二派＝之に對する外人の輿論＝何故に征服せざりし乎＝ナイル河＝蘇士運河＝運河の優勝なる地位＝租借期限の延長問題＝四十年間の延期＝政府は何故に此問題に熱心せし乎＝調査委員の報告＝十三億圓乃至二十四億圓の掛引＝將來の豫想＝奇なる死の宣告

亞歷山港

十二月九日君士坦丁堡を發したる羅馬尼の汽船ダシヤ號は檢疫の爲め希臘アデン港外に假泊する二昼夜、十二日午後拔錨、鏡の如きの多島海を南航し十三日クリート島を右に望み十四日朝亞歷山(アレクサンドリヤ)に着す、折柄回教民の大祭たるベイラムに際せるを以て港内の船舶皆滿艦飾を爲し埃及國旗を揚ぐるを見る、英、露、希、土各國の軍艦もあり獨逸大巡洋艦亦新に入港して祝砲を放ち陸上よりも之が答禮を爲すあり、光景頗る雄壯、下午四時上陸四箇月目に再び亞非利加の地を踏むの人となれり。

亞歷山港は今を去る二千二百四十年前亞歷山大王の築く所、大王死して幾くもなくポトリミー家埃及に君臨し美術を奬勵し博物館を設け廣く文學の徒を召し一時文運の中心たると同時に當時の世界に於ける商業上の樞區たり其最も繁榮せし時代には五十萬以上の人口を擁せしと云ふ。

絶世の美人クレオパトラが初めに百代の英雄ヂユリアス、シーザーと演じ後にアントニーと演ぜしの劇は今に人口に膾炙し、チルソンがレデイ、ハミルトンと握手せしことも亦新なるの事實、ポンペイ此地に斃れて空しくポンペイ塔に其名殘りを留め、大ナポレオンも此地の一敗に豎子をして名を成さしむ、今日の亞歷山は埃及の市と云はんよりも寧ろ歐羅巴の町なり、アラビヤン區域に棕櫚樹に椰子樹にカタコンブに舊堡砦に赤帽に黑奴に其趣味亞非利加的ならざるに非ざるもモハメット、アリー廣小路を中心として四方に擴がれる市街は殆んど歐洲式なり、港灣の設備、船舶の去來、街頭の店舗、往來の人、其服裝、其意匠悉く歐化せり、棉花取引所の光景の如き宛として歐洲大都の商業的中心にあるの感あらしむ、ホテルに入りたる後、車を驅つて博物館を見、郊外に赤色を探り古蹟を檢し取引所を見てモハメット、アリー廣小路に到りアリーの銅像を仰ぐ。

彼や新埃及の創建者たるのみならず、實に新亞歷山市の經營者たり、幾

回か兵戰の巷となり幾回か其主を代へたる此市は昔時の繁華見る影もなく、千八百年頃は僅に五千の人口を有するに過ぎざりしも彼か埃及の支配權を握るや、港灣を改良し運河を通じ四圍の沙漠を青地となし此市とナイル及び各地との連絡を計り以て埃及の呑吐口となしたり、爾來隨時に改良を加へ二十八年前アラビー將軍の亂に多大の損傷を蒙り外人區域は殆んど灰燼に附せられ、又ポート、サイドの新に競爭者として蘇士運河入口に雄視するに拘らず埃及の繁榮は則ち此市の繁榮となり、今や人口約三十六萬三千(千九百五年調査)カイロに次ぐの大市となり希臘人、以太利人を最としレバンチン、佛墺、獨、英諸外人の住居するもの四萬六千、市の行政は市役所之を司どり其年收入約二百五十餘萬圓、支出之に比例し、新に防波堤の修築排水設備等の費に充つる爲め五百萬圓の市債を起さんとしつゝあり、埃及の都市に自治制度を導きしは亞歷山之が嚆矢なり、斯くて此市は依然ナイルの國の最大港として有望なる未來を有するものと云ふべし。

カイロの一週日

明くれば十五日午後亞歷山を發し埃及三角州の最豐饒地を急行車にて貫通する百二十九哩沿道棉花圃、砂糖畑の相連るを望み、青々たる菜園にアラブの兒の鋤を入るゝを見、國中第三の都タンタを過ぎ二たびナイルを渡り薄暮首都カイロの中央停車場に着し、程遠からぬケイジパル、ホテルに投ず。

カイロに在る一週間、或は馬をサハラ漠域に驅りてピラミッドにメンフキュスにスフヰンクスに五千年前の古文明を探り、或はカリフ、マムルクの墓にサラデキンの城砦に中世紀の昔を偲び、或は博物館に圖書館に禮拜堂に宗教大學にマホメダンの教義と文明とを檢し、或は政廳に倶樂部に新聞社に學校に書舗に協會に埃及の現狀を見て、英人の爲

す所、埃及人の感ずる所、自から捕捉し難きに非ず、就中余を喜ばしめしは天候の快晴にして草木青々恰も我が櫻花の季節の如かりしこと是なり。

冬の天國

昨日までは巴幹雨雪の裡に一箇月を過ごし冬の嚴寒に五體の緊縮を覺へたる身の南の方埃及に入りて、夏衣夏帽の人を見、市中市外に綠樹青草今を盛りと繁茂し、ナイルの水の引上げたる後一箇月餘を經過せることゝて、農夫の郊外に出でゝ新に播種しつゝある田畑に若草の青々たる公園に百花の燦爛たる、而して朝夕の凉味特に體に佳なる、恰も四月中旬の暖氣にして冬の寒さ抔此國人の曾て知らざる所、埃及のシーズンは十二月より三月に亘る四箇月にして此間は正に冬の天國なり、斯る好時節なるが爲め米の成金黨乃至歐の旅行好きは燕の如く暖を趁ふて此國に入り込み、ホテルにガイドに日用品に旅費に二割乃至五六割の暴騰を見、左なきだに物價高き此の國をしてシーズンに際しては世界に於て最も費多き贅澤の遊覽地たらしむ、冬の天國も曩中冷かなる余に取つては永駐の地に非ざるなり、一年果して幾何の旅客を吸收するやは何等統計の示すものなきを以て其數を示す能はざるも、試みに最近五箇年間千四百五十哩の既設鐵道旅客數を見るに毎年平均二百萬乃至二百六十萬人とあり、埃及の人口千百五十萬、其九割以上は足鄉關一歩を出でざる農民即ちフェラヒーンなるを以て此等旅客の大半は外人に屬すと云ふを得ん。

カイロに亞歷山にポート、サイドにアスアンにラクソルに國中大都小市の多くは旅客相手に成立せるものと云ふも不可なく、從つてホテルの設備、旅行用具、娯樂機關の完全せると歐洲大都に讓らず、街頭往來の人多くは旅客に非ざれば旅客を得意とする商佔なり、二三の書舗を訪

ふに材料山積し就中政治經濟等に關する書籍の多きに驚かさる、此等高等智識を有する者にして始めて購求すべき高價の政治書類は如何なる人が得意かと聞けば皆旅客なりと答ふ、亞歷山に於てクック社の規模大なるに驚きたる余はカイロに來りて更に其大なるに驚けり、クックはナイル航行の旅客船數隻を有し、運送部をも設け其勢力全埃及に及び、クック支配人の紹介狀は國中の旅行に最大効力ありとは多くの人の語る所、クック社の勢力あるは則ち埃及が旅客の國たるを證するもの、此社の外にも多くの旅客取扱所あり、冬の天國には天國相當の設備あり旅客は此設備に對し設備相當の通過稅を負擔しつゝあるものと見ば可なり。

ピラミッド

ピラミッドにスフヰンクスにメンフヰスにネクロポリスに其名既に世界的にして邦人の此國を過ぎるものゝ必ず一瞥する所、之を叙するは餘りに陳腐なり。

余はカイロ着の翌朝を以て一塊太利人ガイドを伴ひ行厨を腰にし火車にて南走する二十哩、ベトラサイン驛に降り、豫め用意せしめ置きたる驢馬に跨りて西に往く哩餘、先づメンフヰスの古跡に至りラムセス二世の石像を見る、相前後するの旅客兩三列、椰子樹の間を縫ひ沙を蹶つて過ぎサハラ村にアラブの眞生活を探り、其れより漠中に入り神牛を葬れるセラペウムにオンノスのピラミッドにメレルカの墓にテチのピラミッドに、或は高きに上りて大漠を俯瞰し或は地中に入りて五千年前の遺跡に最古人類の文明を探り、正午漠中の一茅屋マリエット、ハウスに憩ふ。

マリエット、ハウスは六十年前セラペウムを發見せし佛國考古學者の名に因みて命じたる旅客の休憩所なり、茲にダシヤ號にて亞歷山に上

陸したる米人夫婦も同じく此に在り、索遜のジョージ親王夫妻一行も輕車に乘じて來り、一同等しく携帶の行厨を開き嘻々として五千年前の遺跡の間に午食す、亦旅中の一快事なり。

食後漠中を疾馳する七八哩にして後四時ギゼーのピラミッド群に達す、廣く世界に傳はれるは此グループなり、スフヰンクスの前にて馬を下り駝背に跨りて撮影す、カイロより此に至る約五哩、電車四十分にて相達すべく、又坦々たる大道に自動車を驅るの客多し、ピラミッドの北に一大ホテルあり、餘りに便利なる爲めか、旅客麕集し、ピラミッドの前面スフヰンクスの後方グラニット、テンプルの裏、黑、白、黃各國の人を以て塡め妖婦の徒の盛裝駟馬に鞭ちて來るもあり、俗氣紛々たり、況んやアラブの兒女の客を逐ふて施與を迫るをや、ピラミッド若し靈あらば人の子の墮落に愬愬すらん、仰げばスフヰンクスに巨像人の瞰視して嘲笑するに似たり。

ピラミッドがスフヰンクスと共に人類最古の技術上の遺物なるは云ふも愚かなり、此に對しては希臘、羅馬の旅行者も五千年後の吾等現世紀の人間も等しく驚嘆を禁ずる能はず、二千三百五十年前の記者ヘロドタスの言ふ所に依れば、大ピラミッド建築の爲め年々三箇月十萬の人を使役し先づ石材運搬の爲め一條の道路をリビヤン山よりナイルに結び附けたるが、此等必要の準備工事に十年の歲月を費し、ピラミッドの建築に二十年を費せりとあり、高さ四百八十三尺、面積八萬二千平方ヤード四十六方尺の、石二百三十萬を積み累ねて成れる巨然たる大三角塔は五千年後の今人をも驚かすなり、第二ピラミッドも規模殆んど相如く、第三は遙に小さきも猶二百四尺の高さを存せり、此等內部の構造乃至建築上の價値に關しては著書の數、汗牛曾ならず、書くも煩はし。

三角塔下メナ、ホテルの高樓に小憩して夕陽の大漠中に沒するの壯觀

を眺め日入つて電車にて歸途に就けば十五夜の大月萬里の平沙を照し壯觀更に一層なり。

市内外の古蹟

カイロの人口六十五萬五千(千九百七年調査所謂アラブ族の根據として君府に次ぎ亞非利加に於ては正に第一位に在り、中に就き外人の數五萬、希臘人、以太利人多數を占むるも諸强國の民亦多く、行旅の客に至りては世界各方面の人種階級を網羅し多き時は數萬、十數萬に上るべく、傲奢なるイスメール、パシャがカイロを以て東方の巴里たらしめんとして企てたる大規模の新市街は宛然歐洲大都の觀を呈せるも、歩して土人街に入らんか光景は一變して猶純乎たるアラブ式なり、中古式なり、彼處の禮拜堂、此處の宗教學校、店舗の物、往來の客、悉くアラブ式中古式にして人若しアラブの文明を探らんとならば必ずしも市中市外に散在する史跡を探るを要せず、眼前に蠢動する彼等の子孫は中世紀其儘の事實を語る。

然れども旅客の必ず一見すべきは古カイロの光景、カリフの墓、マムルクの墳、サラヂンの古城砦にアヅハル宗教大學の類ならん、埃及固有の種族にして基督死後第一に其教を奉じて以て今日に至れる所謂コプト人(現在約七十萬)の古教會堂は古カイロに在り、回教禮拜堂の最大にして最美なるは千三百五十六年より五十九年に亘る三年間にサルタン、ハサンの建てしガミヤ、ハサンなり、尖塔の高さ二百七十尺カイロ數百の禮拜堂中最高のものたり、ガミヤ、ムーヤード亦裝飾の美にして技術の巧なるに於て他に秀づ。

カリフの墳墓も數ある中にカイ、ベイ及バルツクの二者最も有名にしてマムルクの墳墓はカリフの其れに比し規模も小に保存も行き屆かざるが如し、唯モハメット、アリーが菩提所として選びしマムルク墳墓

群中のホス、ヱル、バサは近代に屬する丈に現ケイジプ家の靈棺十數箇を列ね頗る美麗なり、先王チユウンカクの墓はカリフの墳墓の附近に在り、モハメット、アリー自身は古城砦内の禮拜堂に其骨を横ふ。

ハサン禮拜堂を出でゝモハメット、アリー廣小路を過ぐれば則ちサラヂンの築きし城砦なり、彼が今を去る一百年前匹夫より起り埃及全國を平定して王位に即くや、一夕マムルクの貴族四百六十名を城中に招宴し其歸途伏兵をして一網打盡せしめしてふ高壁の間を迂回して上れば彼の築きし禮拜堂に達す、堂後よりの遠望はカイロ全部を眼底に收め、遙にナイルの長江の天際に蟠くるを望み、ピラミッドの漠邊に孤立せるを認むべし、此所よりも更に一倍の好眺望を領し得るは城砦の背後に高く聳ゆる石炭層の丘陵モカタン頂上なり、ナポレオン曾て此丘上を占めて全市の死命を制し、モハメット、アリー亦其故智を襲ふて千八百五年、此頂に砲門を据ゑて城砦を砲擊しクルシット、バシヤを破り城砦を占領したり、歩して之に上るに數百歩にして達すべく、全山一生草なく、ヤユシ禮拜堂寂しく丘の一角に立ち聳脚のアラブ僧夫の余に追して憐みを乞ふありしのみ、頂上の景は流石にカイロ第一なり、此丘を構成する石炭層は北西亞非利加より埃及を越へ遠く中央亞細亞、印度に開展せる廣山の一部なるかと思へば何となく心地好し。

博物館と圖書館

市内外の古蹟を探りアラブ區城の光景を仔細に點檢せば此國の史跡を勞餘すべく、此民の文化を輪廓し得べきも、此國文明の產物を見んには是非とも博物館と圖書館に立寄らざるべからず、所謂埃及博物館には古代埃及は固より希臘時代のものにしてナイル河畔より掘出したるあらゆる遺物を蒐集し此種のコレクションとして最多最要の地位を占む、現在の建物は五百萬法を投じて八年前に新に成りしもの、面積

一萬四千三百三十平方ヤード一たび此中に入らんか五千年前の石器銅器の類は勿論五千年前の吾人人類にも接するを得べし。

アラブ時代の遺物を偲ばんとせば別にアラブ博物館あり、アラブ文明の精華を示す、彫刻石細工、鐵細工、木細工、陶器、建築、意匠等一堂に在り、同じく新建築にしてアラブ式の建物たり、アラブ博物館の階上は即ち圖書館にして三十年來の蒐集に係り、書籍の數八萬部、中三萬五千部は東方即ちアラビヤ、土耳其、波斯、シリヤ等諸國の書物にしてコーランのみにても約三千部に上り波斯の裝飾せる典籍は特に貴重視せらる。

展覽室を一覽するに回教各國歷代帝王の重寶とせしコーラン聖典の見事なるもの多數あり、マムルク時代のサルタンの所持せしもの特に立派なりき、其他印度、波斯、土耳其、支那、アラビヤ諸國の詩聖、史家の手に成れるもの亦尠からず、據てマホメダン文學の淵源に溯るを得へし。

アヅハルと埃及兩大學

圖書館にアラビヤ文學を味ふたる者はアヅハル大學を訪ふて其子孫教育の現狀を檢するの興味深きを覺ゆるならん。

アヅハル大學はファミチット時代のサルタン、ムカヅの將ゴハルの建てし所、正に紀元後九百七十三年に在り、後幾くもなくしてカリフ、ユル、アジズ之を大學(九百八十八年)に改めたり、方形の大建築にして獨り埃及一國のみならずマホメダン社會に於ける最大の學府視せられ、現に學生の數約一萬二千、教師四百人、案内の僧に伴はれて廣き方形の内庭を過ぎ堂内に入るに多數學生の彼處此處に或は祈禱するあり或はコーランを默誦するあり或は横臥するあり、聞く學生はマホメダン各國より來集し就中最も多きは埃及を除きシリヤ人五百、モロッコ其他佛領北亞非利加人三百、土耳其人二百五十、メビヤ及蘇丹地方二百人等に

して波斯のクルド人三十印度人六、アフガニスタン人五、瓜哇人三十あり、此等は別に一廓を爲して起臥するを見る、中には遠くサハラの漠中より來れる黑奴もあり、大學の總長をセイク、エル、ガシャ又はセイク、エル、イスラムと呼びセイク即ち教師中の最も重望あるものよりケイジプ之を任命す。

入學手續は極めて開放主義にして回教徒ならば何れの國人たるを問はず苟も學を欲し遠く笈を此に負ふものは、讀み且書くを得るを程度とし十五日間の試驗の後之が入學を許可し毎日食を給し校內に寄宿を欲する者には收容し得る限り之を許す、尤も埃及本國人は一年間試驗の後食費を給するを通則とす、寄宿以外の學生は大抵附近の民家若くはメドレッセに泊して通學す。

外國より入學せしものは先づアラビヤ文法を學ばしめ略アラビヤ文學に通じたる後マホメットの教義を授け、然る後に宗教法律に入るの

順序とす、教授法は極めて舊式にして暗誦に次ぐに暗誦を以てし毫も思想を鍛錬せず、一意コーランの前に盲從せしむるを以て何等獨想なく自發的訓練なし、近來此弊を矯めん爲め新教育法を施さんとの議あり普通學校にてアラビヤ語もて算數學を教授するが如く本大學にも新學を輸入するの計畫あるも、今日迄の所にては依然迷信の源泉として徒らに多數の學生を擁しマホメダンの偏狹的狂熱的氣圍氣を世界に傳播するの具たるに過ぎず。

大學を辭し歩して街頭に出づるに土人の書肆軒を並べ流石はマホメダン文學の中心たるを思はしむ、試みに同行の一埃及士官に依りコーランの一本を求めんとするに何れの書店にても要領を得ず、何故なるかを問ふに友答へて曰く、彼等は外人たる君に聖典を賣るを欲せざるなり彼等の迷信憐む可し、君若し强て之を得んと欲せば他時人を派して之を求めしむる則ち可と、始めて知る彼等は余の外人たるを見て錙

銖の利を得んが爲めに神聖なる教典を異徒に授くるを欲せざりしを。

舊式の當大學を除き一昨年十二月始めて開校せられし一私立大學あり、名けて埃及大學と云ふ、謗はれて之を怠觀するに歐風の新建築にして政府、宗教省の補助及民間の寄附より成り、以太利人は理科に要する貴重の器械其他を寄附し、佛國人も毎年三名の留學生を自己の費用にて引受け、其他在留列國民の同情多く、現在は文科を主とし附屬として經濟科と女子部とあり、其科目よりせば大學と名つくるには不當にして正しく高等學校程度なり、學生男子三百十七名、女子八十六名、埃及人の外に英、佛、以、希、獨其他各國人あり教授も埃及人の外に以太利人三、英人一、佛人二、獨人一あり相當の學者を招聘せり、現に此校より歐洲に留學せるもの十九名、圖書部も一以太利人監督の下に既に八千部の內外書籍を蒐集せり、大學の名譽總長は埃及王の儲君にして總長は王の叔父フォウド、パシャなり、書記長余に我大學の規則書を寄贈せんことを囑せり、切りに各國より材料を蒐集し新式の教育を以て斯邦の最高學府たらしめんことを期しつゝあるが如し。

向學の新氣運

大學參觀の序に思ひ浮ぶるは此邦教育熱の物與なり、從來とても敢て教育に努めざりしに非ず、最近の統計を見るに小學中學の數も著るしく增加し千八百九十七年教育方針の改定當時七歳以上の男女にして讀且書するを得る者の數僅に全人口の五分八厘に過ぎざりしもの、一昨年末に至り男子は六分二厘五毛を增し女子は五割を增加するに至り、就學者の數亦大に增し就中女子就學者は非常に激增し小學校に就て見るに最近五箇年間に四割四分の增加を見る。

元來埃及の舊教育制度はアヅハル大學を中心とし各地方に寺領を有する寺小屋あり、專らコーランを暗誦せしめしもの、其缺點は第一、童子

に暗誦を強ひ何等思考力又は觀察力の養成を爲さず、第二、暗誦を強ひ記憶を尙ぶの結果授業課目の數を增し、益を貪りて質を蔑し、第三、體育と品行とに何等の注意を拂はず怠惰、不規則、無訓練の儘に放任したり、斯くて人材を得んこと思ひもよらず、英人は漸次に其弊より救はんと欲し徐に改善に歩武を進めつゝあるが如し。

英の埃及を占領するや、先づ以て人民の生存問題に全力を注ぎたり、饑餓は無智よりも苦しきは何人も知る所、敎育の必要は固より然るも、人命財產の保護及法律維持の更に必要なるに如かず、特に埃及の如き人民の生命は一に政府の公共事業に繫る國に在ては治水工事の如き大切なる事業に留意すべきは政府の爲すべき第一義たるは勿論の事なり、故に政府は先づ多數學生を敎育すべき敎員と公務に服すべき下級官吏の養成に第一歩を着けたるが、其初めに於ては是等官立學校に入學する兒童の數甚だ少く强制又は勸誘に依り漸く定員に滿つるの有

樣なりしもの、今日に於ては就學者激增し一般に敎育の必要を感じ其設備を要求するの聲高く、却て政府が敎育に冷淡なるを攻擊するもの多きに至る。

且や政府は新に地方會議の權限を擴張し、初等並に農工敎育の監督權を之に委任せしを以て從來此等學校の維持費を供給するに困難を感じたるもの、爾今地方會議自ら之が經營の任に當るべきを以て其數なきに至るべく、歐人敎師のアラブ語を解する者漸く增加し、土人敎師の數漸く增加するに從ひ、アラブ語を以て科學を敎授するを得るに至るべく、現に算數はアラブ敎科書を用ひつゝあり、從來敎員と敎科書とに乏しかりし爲め中學敎育以上には外國語を以て敎授したるを以て埃及人は苟もすれば是れ英人が我國語を絕滅せんとするものなりとて攻擊の矢を放ちたりしもの、此方針にして實施の歩を進めんか聊か以て滿足の意を表せんか、埃及人が政府の施設を以て不充分にして不熱

心なりとし罪を英人に嫁し其急進を絶叫しつゝある間に、英人間には早く既に此國教育の餘りに放任に失し餘りに高きに過ぐるを非難し、治者たるの教育を排し空論家の養成を排し普通實學を修めしむるを以て程度とすべしと論じつゝあり、英人の此國施政に與るもの固より這般の理を解するも如何せん國民向學の新氣運は自然に茲に至らしむるものにして、埃及人が之に依り漸次國民的思想を胸裡に浮べ、當年の隆盛を回想して獨立を希望し其結果排英熱をして上下に彌蔓せしむるに至る、歴史するも不可、歴せざるも不可、人の國を治むるの難き東西古今相同じと云ふべし。

國家的精神の勃興

埃及に於けるナショナリストの氣焔は多少承知し居るたも親しく其地を踏むに及び意外の熾盛に驚けり、英人の堅忍にして巧妙なる能く

佛人を排して優勢の地歩を占め三十年の經營を經、人をして『英國の埃及』と稱せしむるに至りたりと雖も埃及は依然としてサルタンの主權下に在りて土耳其のハイ、コムミッシヨナー、カイロに駐し、此國が治外法權の下に立ち國際裁判所の活動する自ら英人をして司法の權を專らにする能はざらしめ、財政委員會は最早昔日の權なきも猶英人の財政權を掌す、若し夫れ事苟くも外人に關する件ならんには一事一法を新にするにも十五關係列國の同意を要し、現に提案中のもの多きも一として解決せられたるものなしとは昨年度の報告に於てゴルストの公言する所なり、此の如き至難の地位に在りて優勢を保たんと欲するは此國民智識の程度の進むに從ひ益々至難の業たり、ローズヴェルトが埃及に於ては一段の高壓政治を要すと喝破せるもの所以なきにあらず、然も高壓せんか國民の反撥は更に一倍せん、英人能く商務の利を收め經濟上の地歩を占め得たりと雖も名實共に之を其治下に置かん

こと恐らく猶多少の困難を伴めざる可からざらん。

埃及に於ける排英熱は最早屋内の私語に非ずして街頭の公話題なり、既に公話題なり故に總領事ゴルストは昨年度に於ける埃及の事業成績を英國政府に報告し其結論に述べて曰く「現在埃及施政上種々の妨碍たるべきものの最大なるは、此國の非官吏社會及中等階級に於ける占領國(即ち英國)の企圖に對する信用の缺乏に在り、政府の提議する計畫に一々敵意を以て之に臨むに在り」と、然り官吏社會は衷心英國の施政に服するものあらん、利害上默從せるもあらん、ゴルストよりして見れば非官吏社會と中等階級とが排英思想に滿てりと云ふは其然るべき所、英人は國民の大多數を占むるフェラヒーン即ち農民は英人の善政に依りてクールバシュ(笞刑)は廢せられコルベー術役制も無くなり、水利事業の進捗は收穫を增加し生命財產は安固と爲れるを以て能く自己の政治に服するものとなしつゝあり、ゴルストの報告にもフェラヒーンを含まざるは其反證なり、然れども官吏社會の中衷心英人に服するもの果して幾人ぞ。

亞歷山著港の日アラブの一案內者を備ふ、彼や英語を解し洋裝を爲し歐人に依り衣食する者、余の日本人にして英の同盟たるを知るの彼は義理にも英人を賞すべき所なり、然も余の試み問ふに答へて曰く「我等埃及人は英人を喜ばず、總ての階級總ての同胞は排英思想に滿てり、英人を喜ぶ者は少數のコプト(アラブ侵入以前、古くより埃及に繁殖したる住民にして夙に基督教を奉ず其數七十餘萬)と在住歐人の一部分のみ試みに思へ人を使役する牛馬の如く、少しく意に滿たざれば叱咤怒號に次ぐに鞭を以てし甚だしきは土足を頭上に加ふ、而して口に云ふ我等は笞刑を禁じ水利を興し產業を勸めて斯民を塗炭より救助したりと、曷んぞ知らん彼等は彼等の爲めに此國を占領し彼等の爲めに勸業し水利したるのみ、昔時の笞刑は多くフェラヒーンに限られしも今

の所謂算刑は上下の階級に及ぼ以て文明の政を布くと云ふ、我れ斷じて其可なるを知らざるなり」と其氣焰當るべからず、余更に問ふ、然らば君の如き風想を有する者多々ありやと、彼れ聲に應じて曰く「然り然り千三百萬の埃及人はコプトを除き皆余と此風想を同ふす、我輩は悉くナシヨナリストなり」と、余は頗る好奇心に打たれ、珈琲店に、車上に、店舗に、往來に、機會ある毎に彼等の所感如何を探れり、余は散髮店に就き一希臘人より同樣の話を耳にせり、カイロ行の汽車、バヌーヨ行の汽車、ベドラサン行の汽車に於て多くの埃及人より同樣の語を耳にせり、而して英人其れ自身の口よりも亦之を聞けり、英人は實に多くを爲せり、埃及の安寧と繁榮とは實に英人に負ふもの、而して排英の熱は日に高まらんとす、蓋にローズヴェルトがカイロにて埃及人の輕舉を笑ひ國民業の浮薄を戒むるや一般の之に對する反感甚だしく亞歷山に着せし時の如き彼は直に船室に飛込みしに拘はらず、多數の青年は追ふて埠頭に至り船中に入り彼れに一擊を加へんとし怒號して已まず、稅關吏と埠頭運卒との極力防止せしに依り幸に事なきを得たりと云ふ、英人の地位も亦難い哉。

流石は英國

埃及の國民熱は此の如く殆んど沸騰點に達せんとしつゝあり排英の氣焰は上下に彌蔓せるも、流石は英國なり、英國に非ずんば此至難の地位に立ち埃及をして今日あらしむるを得ざりしならん、千八百八十二年アラビーの暴動を平げ英佛二頭政治より英の獨力占領政治に移りしより茲に三十年、英人は何を爲したる乎は餘りに多く世に知られたる事實、クローマーの著ミルナーの著、年々の青冊（ブルーブック）乃至數百を以て算する公私の刊行物は埃及に於ける英國の善政を語りて餘りあり、此平和の三十年間に埃及の人口は七百萬より千百五十萬に激增したり、九百

萬磅の歳入が千六百五十萬磅に激增したり、千九百五十萬磅の輸出入が五千五六百萬磅に增加したり、二百二十五萬カンターの棉花が七八百萬カンター(一カンターは約四十七キログラム九)に增加したり、千八百七十七年のナイル給水の少かりし年に約一百萬エーカーの不作地ありしもの千九百七年の同じナイル給水の少かりし年には僅に十萬エーカーの不毛の地ありしのみ、埃及の母にして此國死活の源たるナイルの治水工事年々進捗して耕作地を增加しつゝあるは英人の爲す所、强制勞役を强ひたるコルベーの廢止は英人の爲す所、笞刑クールバシュの廢止は英人の爲す所、司法を改善し、行政を整理し、教育を興し、學校を設け兵制を改め、警察を起し、水運に鐵道に水道に都市の改良に英人の爲す所を舉ぐれば僕を更ふるも亦足らず、要するに埃及は英人三十年の苦心經營に依りて新生命を得んとしつゝあり、英人はグラッドストーン始め屢々列國に向つて事情の許す限り成るべく早く埃及より撤退すべきを公言し埃及の爲め最善を盡したり、而して今日埃及國民の上下に『英人撤退すべし』『占領政治廢すべし』の聲漸く熾なるは英の善政則ち然らしめたる所、英國は千九百四年に至り佛國と協商して其妨害を防ぎ獨り埃及の經營に專らなるを得、漸く外患を除き得たりと雖も新に國民思想の發達に依り內憂を釀しつゝあり、埃及に於る英國の未來は頗る多難なるも、余が一旅客として埃及政廳の門を叩き財政顧問と語り、新農務局長を訪ひ、農務協會を訪ひ諸官衙の狀況を視察するの機を得たる時一皆したるのみにて佛人の治下に在るアルゼリヤ若くはチユニスの政廳に比して更に風氣の振肅し更に規律の整然たるを感じ、坐ろに『流石は英國』の語を發するを禁ずる能はざりし也。

埃及の獨立熱

埃及に於ける國家的新氣運、國民熱の熾盛を致せる事實については既

に之を逃ぶる所ありしが、蘇丹より再び此地に歸來し國民黨首領ファリド、ベイ(新に君士坦丁堡より歸れり)副首領アリー、カメルと會し其言ふ所を聽き又新しく其經營せる學校、新聞、會社等を一瞥し彼等の確信と熱烈の狀況とを見て更に國民熱埃騰の侮るべからざる勢力たらんとするを看取せり、彼等は正會員八千を有し各會員年二磅の會費を納むるを以て年收十六萬圓、外に無名の寄附尠からざるが如く、機關新聞を有する五、夜學校三十二、晝間學校八、又十萬圓の資本を以て埃及商業會社を創立し店舗をカイロに有する二、產業の奬勵と同時に會の活動に資し、其勢力は年々に擴大しつゝあるが如し、試みに黨の創立者ムスタファ、カメルの設立し現に其兄アリーに依り經營せられつゝあるムスタファ、カメル學校を參觀せしに現生徒の數、小學部五百十六名、中學部五十六名(一昨年初めて中學部を設けたり)創立以來十四年を經て卒業生を出だす既に七百十五人、年々黨より八千圓の補給を得て俊才四名宛を歐洲に留學せしめつゝあり、一年の經費約四萬圓、校舍の設備教授法等先づ整頓せるものゝ一に算すべく、アリーは更に五萬圓の自費を抛つて現校舍に接せる宏大なる三層樓を手に入れ女學部を新設せん爲め目下修繕工事中なり、女學部は五百名の學生を收容し得べく、一私人の經營としては頗る成功せるものと觀じたり、校内の廣場は能く五六千の人を容るゝに足り、故ムスタファ始め黨の有力者は屢々此廣場にて慷慨演說を爲し聽衆を醉はしむと云ふ、首領ファリド、ベイが數十日を出でざる土耳其行より歸來し停車場に着するや黨員其他同趣味の徒の彼を迎ふるもの五千人、非常を警戒する爲め警官は場の内外を警め出迎の二青年は政府攻擊の大道演說を爲したる爲め一時拘留せられたりとは半官紙の報ずる所、又官立の一小學校を參觀するに、學生六百餘名、偶々放課の時刻となり六百餘名の學生が廣場に整列し徒手體操を爲すを見る、擧動頗る活潑なり、校長白髯を撫しつゝ余に語つ

て曰く、此等は皆未來の國民なり、誰人も未來を豫言し得るものなし此等未來の國民が世に出づるの日埃及は果して如何の變化を來すべきと嘗に獨立の必至の勢ひなるを示すものゝ如し學校長にして抱く所の思想既に此の如し、英人が『埃及の警官も軍隊も多くナショナリストなり排英主義者なり』と悲觀する所以なきに非じと思はしめたり。

國民黨の主張

國民熱醗酵の中心は所謂ナショナル、バーチャーなり、所謂ナショナリストなり、カイロのコンチネンタル、ホテルの横に黨の倶樂部あり、首領はフェリド、ベイと云ひ副首領二名、一は前首領ムスタファ、カメルの兄アリー、カメルにして他はアーメッド、ルトフヰと呼ぶ、會員名簿に登錄せるもの約八千、無名の會員は全國到る所に散在す我等同胞は皆我が黨なりと傲語せり、試みに倶樂部を訪ふて副首領アーメッド、ルトフヰ新機關紙アル、アラム主筆セイク、シャウヰチ其他と語る、宏大なる建築の二階を本陣として、玉突室あり休憩室あり應接室あり事務室あり其規模必ずしも我が大政黨の事務所に讓らず、其唱ふる所は一言を以て之を掩へば第一、英國軍隊の引上げと英國政廳の撤退なり、第二、立憲政府の創設なり、此二者は先づ彼等の要求する所にして諸般の施設改善は之に伴ふて起るべきものとの極端說を持せり、彼等は敢て云ふ、英人の爲す所は百事百物唯英人の利益にして我等國民の不利益なり、水利は英人の爲めとなるも我等の爲めならず、交通機關は英人の爲めとなるも我等の爲めならず、クールバシュ(笞刑)を廢したりと云ふも實は然らず、英人は日にクールバシュを我等の頭上に加へつゝあり、英人は斯民を愚にするに是れ力む、英人は我文學の根元にして國語たるアラブ語を小學以上に用ゆるを允さず中等教育以上の高等教育を禁せんとし、中學教育と雖も其設備は希望者の十の一を滿たす能はず、千二百萬の

人口を有する我國に一農業學校なし、三四の商業學校あり技藝學校あり近年一私立大學を設けしも是れ名は大學なるも實は高等學校に過ぎざるのみ、英人占領以前我が國民中讀且書するを得しもの一割三分内外なりしもの三十年の歳月を經、英人の所謂善政は我が國民を却て恐にし匿に九分に減せしめたり、我等は年々窮乏の國庫中より少からざる額を割きて蘇丹の經營に投じつゝあり、蘇丹は英、埃兩國旗の下に在りと云ふも其實は純然たる英の領土と化し去らんとす、蘇丹は現ケーヂブ家の祖モハメット、アリーが血を以て征服せし所、埃及の運命はナイルの水に屬し、ナイルの水は蘇丹より來る、蘇丹と埃及とは兩分すべきものに非ず、故に英人にして果して坦懐能く蘇丹の經營を其條約の示す所に依り我れと分つの誠意あり少くとも蘇丹の一半をして我が有たらしめんか、我等は必ずしも政費の補給に反對するものに非ざるも、如何せん英人は人の褌を以て相撲を取りつゝあり、モハメット、ア

リーの遠き昔は更にも言はず、ヒックスの軍もゴルドンの軍もウースレーの軍も總て我國民の壯丁より成立せしに非ずや、キッチネルの克復亦然り、而して今も猶蘇丹の守兵は大部分我埃及兵ならずや、英人苟もすれば則ち云はんとす、埃及人は絶對に兵隊嫌ひなり、若し家に多少の產あらば其最後の衣服をも典質して二十磅(二十磅にて兵役の義務を償ふを得る制度なり)を得以て兵役を免かれんとすと、知るや否や我國人の兵役を忌む所以を、埃及の兵役は唯英國の爲めにして埃及の爲めに非ず、否寧ろ自國民に對し弓を向くるものなるを、且つ彼等の多くは盛冬猶日中百度以上に上る蘇丹の漠中に曝らさる、生還する者果して幾人ぞ、兵役に服するは人の奴隷となり人の囚徒となり而して人の爲めに働くもの、斯の如くにして何れの國人か兵役に服するを喜ぶものあらんや、我憐むべき兵士をして我國の主權を擁護し我國民を保護するの干城たらしめよ、我壯丁は爭ひ好んで劒を執るの人たらん、英人

は自己の防備自己の利便の爲め不急なるポート、スーダンとアトバラ間三百哩の鐵道を敷設せり、而も我政府より前借して之を敷設せり、我埃及には國利民福の爲め敷設を必要とするの地方眼前に横はる、而して英人は彼を先にして此を顧みざるなり、英人は自國に必要なるが爲め、切りに棉花と砂糖黍の產出に腐心す、而して他を顧みざるなり、我農民の要求する所は棉花砂糖に非ざるなり、農民は先づ日常の食類を要す、產物の種類多きを要す、而して後棉花可なり砂糖可なり、我等は敢て棉花砂糖の產出に反對する者に非ず、否な大に之を奬勵せんと欲するもの、唯英人が自國の爲めにするに專らなるに反對す、財政に就て言はんか、成る程英人はイスメール時代の破產狀況より我國を救へり、然れども我國の債權者は獨り英人のみに非ず、債務の整理は關係各國の等しく利害を感ずる所、我等は英人の手に依り財政の整理せられ又せられつゝあるを忌むものに非ず、財政を整理するに乘じて此國を彼等の屬領地たらしめんとするを惡む者なり、且や多數なる彼等の文武官吏に高祿を給し我國力を糜す、財政を經濟的に整理したりと云ふべからず、少くとも更に整理の餘地を存す、若し英人にして眞心我國の進步開發を念とし之を事實に示すに於ては我等と雖も同じく人なり、誰か之を感謝せざる者あらんや、我等の彼等英人を排するは口を仁義に藉り我等を直接たらしめつゝあるに在りと、其云ふ所概ね此類なり、

國民黨の創立者

彼等の言を藉れば埃及に於ける國民的運動はモハメット、アリーが百年前土耳其の羈絆を脫せんとて兵を擧げて小亞細亞を征服しシリヤを征服し首都君士坦丁堡を脅かしたるの時に胚胎す、アリー及び其長男イブラヒムの雄略も前には佛、後には英、墺の威力干涉に依り、遂に獨立の實を得る能はざりしは彼等國民中心あるものゝ痛哭したる所、

アリー、イブラヒム、セイド、アバス等歴代の文明輸入政策は此國を富强ならしむるの一點に存せしも、傲奢にして事業好きのイスメールの世となり鉅額の負債は此國をして破産に瀕せしめ列國干渉の端を啓き、斯くて千八百八十二年に起りしアラビ將軍の暴動は醸結せし國民熱の爆發と云ふべく、彼等はアラビ、パシャを以て國民黨の軍隊的方面を代表せしものとなせり、然れども現在の國民黨創立者は一昨年三十四歳の壯年を以て病の爲め夭折せしムスタフア、パシヤ、カメル其人なり。彼れ幼にして法理の學を修め又佛國に留學し煽動的女傑マダム、アダムに訓育せらるゝ所多かりしが如し、彼が十九の幼年より三十四の死の日に至る迄アダムに書き送りし文翰は積んで一卷の書を成せり、就て之を見るに慥かに己を信じ母國獨立の爲めに盡さんとする燃ゆるが如きの熱血漢なりしを知るに足る、彼は少くとも煽動家たるの資格を有せり、彼は又事業經營の手腕あり、その世に在るや、アラブ語の機關新聞アル、レワの外、英、佛語の新聞各一を發刊し英人其他の外人記者を使役したり、彼はムスタフア學校を創立したり、彼は屢々歐洲に赴き歐洲に同情者を得たり、而して埃及青年の彼を仰ぐ泰山の如く彼れが筆に成る記事著書は驚くべき熱心を以て青年の好讀する所となり彼れの演說はプロフエトの聲の如く聽衆を感動せしむ、彼は稍我吉田松陰に類するの性格を有せしやに思はる、彼が死の三日前にアダムに送りし書を讀むに、至誠惻々、國民の前途を憂ひて死神の身を纏ふを知らざるものゝ如く、臨終に際し、兄なるアリイ(現在の副首領)の手を握りつゝ極力自國民の爲めに盡すべきを懇囑せるが如き、正しく熱血漢の風格を存し革命家の氣概を備ふ、彼の死するや舉國の青年父母を喪ふが如く、官憲の手を盡くして之を制止せんとせしに拘はらず葬儀の日(一昨年二月十一日)學生の多くは登校を廢して彼の葬儀に伴ひ、弔客の數約五萬、四十日目の弔祭に集まりたる弔電一萬三千三百三十四通、弔文八

千四百三十通に上りたりと云ふ、國民黨倶樂部の壁間に風采瀟洒たる彼の大額あるは勿論、到る處に彼の肖像の掲げあるを見る、一日カイロの北十五哩なるナイル河のバラージを見物し、歸途一希臘人の家らしき狹く小さき珈琲店に憩ふに、故英皇エドワード陛下の肖額に對して彼の肖額ありしには聊か驚きたり。

彼れ死してフエリド、ベー後繼者となり、彼の兄とアーメド、ルトフヰの二人副首領に選擧せられたるは既に述ぶる所、彼の機關紙たりし英佛字の新聞は休刊し元機關たりしアル、レワは彼が親戚の一人たるオスマン、ザブリに依り經營せられつゝあるも、國民黨は別にアル、アラムなるアラブ新聞を興して正機關とし前のアル、レワ記者セイク、シャウヰを主筆とし、又アラブ語と佛語混用のラ、デペッシエ、エヂプシンとアラブ語のミスル、イル、ターラーの二機關紙を發行しつゝあり。

前首相の横死

本年二月二十日埃及の首相ブートロス、ガリー、パシャが一埃及人の爲め退廳の際殺害せられたるは邦人の或る者の耳にせし所ならん、ゴルストの最近報告には劈頭之に言及せり、曰く『兇行者は首相に對し何等個人的の怨を抱き居らず又宗教的迷信(首相はコプト族にして即ち基督教徒なりき)にも因由せず、其陳述に依るに兇行者はシヨナリスト機關紙上に繰回し激烈の口調を以て攻擊されたる首相に對し死の刑罰を與へしと云ふのみ、假令彼れ獨り刑罰に服するとも國民黨の首領連は此兇行に對し道德上の責任を免れずと斷言するを憚らざるものなり、首相が長日月間彼の國の爲めに盡し、又最も困難にしてデリケートなる地位に在つて彼の示せし忠實と清廉とは喋々を要せずして能く一般に知れ渡れる所、首相の死は實に埃及の回復すべからざる損失

なり、ゲーザブ及び其國民は彼より以上の熱心直截なる而して有爲なる公僕を得んには猶久しき歳月を要せん』と言ひて彼の死を痛惜し國民黨に一擊を加へ居るを見る、彼の死は國民黨の爲めに非らざるも其主張に煽動せられたる者の所爲たるや明かなり、余曾て信ずべき埃及人に就き所謂ナショナル、パーチーには土耳其青年黨の如く一部の秘密團體あるや否やを糺したることあり、何となれば國民黨倶樂部應接室にはムスタファとフエリド故新兩首領の寫眞に對し土耳其革命の花形役者たりしニアジとエンベル兩少佐との肖像を掲げあり、土耳其は彼等の宗國にしてサルタンは彼等のカリフなり、言語、人種を同ふしアラブ文化を同ふせる彼等が土耳其に歸依するは自然の情なるべきに於て彼等の土耳其青年黨に負ふ無形上の聲援は延て其組織行動にも影響あるべきを思ひたればなり、彼れ乃ち答へて曰く『余は其存否を知らず、首相ブートロスの死は國民の此賣國奴に加へたる私刑なり、誰人も兇行者に連累ありしや否やを知らざると同樣國民黨中に秘密結社あるや否やを知るものなし、其存否は說明以上なり、然れども賣國奴は何人にても首相と同樣生を全ふするを得ざるなり』と、首相の死に關し國民黨一領袖の言ふ所を聞くに由來彼は賣國奴なり破廉恥漢なり國民は夙に彼に死の宣告を與へざるべからざりしなり、君知らずや今を去る十二年前即ち千八百九十八年キッチナル將軍のカリフアの軍を殲にし蘇丹を克復するや、蘇丹に關する英、埃兩國の關係を設定するに際し蘇丹は當然埃及のインテグラル、パートならざるべからざりしなり、然るに彼れブードロスは身外務大臣の重職に在りながらクロマー卿に乘せられて蘇丹九十萬平方哩の大地域を擧げて名は英埃領と云ふも實は英國の一領土と化せしめたり、之を賣國奴に非ずして何とか云はん、彼は此非行を自ら悟らず爾來英人の爪牙となり英人の利益を擁護する十餘年、昨年來蘇士運河會社は其租借期限たる千九百六十

八年を更に四十箇年延長して二千八年迄となさんことを提議するや、彼は再び寶國根性を發揮し之に同意を表し、剩へ事成るの日は會社より十萬磅の賠賂を受くるの約を爲したるは確實なり、孫士運河の保持は英國に取つて印度の維持に東洋の貿易に缺くべからざるの保障たると同樣、我手中に在らざるは我國をして起つ能はざりしむる所以、運河は我の死活に關す、前に我政府の愚にして英政府の猾なる巧に我を籠絡して其所有の株を擧げて手中に收め茲に覇權を洋の東西に確立したり、我等は之を以て終世の恨事とす、故に一日も早く運河の我手中に復歸するを翹望しつゝあるに何等の痴漢ぞ、身一國宰相の任を辱ふしながら黄白と權威とに眩惑し租借期限の延長を諾せんとす、幸に大會議に際し滿場一致を以て否決したる爲め今や此談判を中止するの已むなきに至れりと雖も、彼が心事を思ひ其爲す所を見れば苟くも生を此國に享くるもの誰か其賣國的破廉恥行爲を憎まざるものぞと、眦を

揚げ肱を張り涙を落さん許りに激昂の態度を以て語れり。

高等學生倶樂部

破壞は青年の事業なり革命は壯靈の手に在り、カイロに一高等學生倶樂部あり、會員七百名、會頭は國民黨副首領アハメドの實兄オスマン、ルトフ氏にして元大學教授たり、今は此國有數の法律家として幾多會社の社長として德望特に顯著なり、此青年倶樂部に於ける縱横の氣焰は驚くべく、苟も英國を口にし英人を說くは此倶樂部の大禁物なり、彼等は余を擁し『日本は近來傲慢となり、印度及支那其他日本の文物を慕ふて來る外國學生を甚だしく輕侮し、印度支那の學生は漸く日本を去り歐洲に學ぶに至りたりと聞く眞なりや』とか『從來埃及人も大に日本の高義と實力とを尊敬し居たるが、日本が朝鮮を取りしより漸く日本を忌むに至れり、此次は何の國を取るや然し埃及は取らざるべし、餘り

に遙かなればなり』と云ふが如き口調にて、無遠慮に論鋒を向くるも青年血氣の徒必ずしも意とすべきに非ず、余は丁寧に其然らざる所以を說き聞かせたるが、此等高等教育を受けたる青年は悉く他日の國民黨たるべきは明白なり、英人の當局者は如何に此風潮を善導すべきや、ゴルストは此風潮を以て國民派新聞の煽動的記事、相互の誤解、少數非英國的人士の論議に歸し新聞紙法を更に嚴重に適用するの必要あるを報告せり、コハ現政府の採れる方針なるが如く、カイロに於ける余の滯在僅に一週間の中二回、一は即ち國民黨の機關ラ、デベッセ、エジプチンの記者ダルジラ(西班牙人)なる者、治安に妨害ありとて埃及退去を命せられ、多數の同趣味者歎呼の裡に亞歷山に向け歸國の車に上るを目擊したり、他の一回はコプト黨の機關たるエル、ワタンなる一新聞がアラブ文化を攻擊するの論文を掲げたる爲め、此國最大多數の人民(即ち回教徒の多數を占むるは言はずして明かなり)の文化を非議し相互に反感を挑發するは治安に妨害ありとて新聞法に依り警告を與へられたるを聞けり。

溫和說の二派

前述ムスタファ、カメルの創立せしナショナル、パーチーは所謂急進黨と云ふべく此派は固より多數を占め多少の組織的行動を爲しつゝあるも他に溫和主義の二派あり、一を憲法黨若くは溫和ナショナリストと呼びハフヰヅ、アワド、セイク、アリ、ユーセフ等アルモヤードなる機關新聞に依りて自說を主張し、他を人民黨若くは地主黨と稱せられアクヌク、プアナス之を率ゆ、其に終極の目的は急進黨と同じきも、其唱ふる所漸進的にして先づ憲法政治を布き自治權を擴張し得ば暫らく英人の下に立つを辭せずと云ふに在り、彼等は先づ教育の發展、國會の開設、宗教裁判所の改正、アヅハル大學の改良、女子の向上等を主張しつゝあ

り、急進黨の別働隊の感を爲すも未だ組織的行動を爲すに至らず、此國の政論家は土耳其の政論家と聊か其選を異にす、土耳其の青年黨は敵として多數の守舊派を有するも埃及の國民黨は敵とする所は占領國に在り、此れ兩國の國際的地位相異れるよりして然るもの、而して埃及各政派の大同小異なる所も亦彼等の立場之を然らしむるものか。

之に對する外人の輿論

國民黨其他二派に對する外人間の評を聞くに多くは冷笑を以て之を迎へ、彼等は唯口の人なり能く何事をか爲さん、彼等は代議政治を欲すと云ふ、云ふ所の人果して代議政體の意義を解せりや、且千二百萬の埃及人中讀み且書するを得るものは百中の八のみ、半人半獸の如き沙漠の漂泊民に果して代議政治の權を與へて如何にすべき、彼等は埃及より英軍の撤退と英政治の放棄とを希望す、英軍撤退し英國其手を引けば、埃及は忽ち破產すべし、埃及は『埃及人の埃及』に非ずして『治外法權の埃及』のみと、グローマー卿もゴルストも其他の人士も皆此說を爲せり、在留十有餘萬の外人苟も此國に放資し此國に來往し此國に土着し此國に利害を有する者は大抵此說を爲せり。

千八百八十二年埃及の施政英國の手に歸せしより茲に約三十年、財政の整理に、治水に、交通に、警察に、司法に、鑛業に英國は埃及に對し大なる功德を施せり、埃及は英國を待つて始めて存立すと云ふも不可なく、英國なくんば今迄に築き上げられたる施設は忽ちにして破壞し去らるべしとは外人の輿論にして今日迄は慥に然りしなり、今後も或は然らん、然れども永久に然るべしとは恐らく何人も斷言するに躊躇せん、埃及は曾て世界最古の文明を誇れり、斯民にして到底自立する能はずとは何人も斷言するを難せん、要は程度の問題に過ぎざるべし、埃及人中少くも其一部は自立するに足る、約束の如く我國より撤退せらるべし

と主張しつゝあるは彼等國民黨の聲なり、青年の徒の聲なり、恐らくは一般の聲ならん、而して外人は曰く否彼等に自治の能なし、沐猴に冠せしむべからず、英人は曰く埃及の撤退は我等が認めて以て可なりと爲すの時に於て始めて實行すべきのみ、撤退と否とは我等の有する權能にして埃及人の有せざる所、今日は云ふ迄もなく撤退すべきの秋に非ず、撤退は破産を意味し沙漠を意味す、撤退の日は果して何の時にか來るべき、長く其期の來らざるやも知れずと、斯くて一方が其主張を撤回せざる限り、國性を變化せざる限り、撤退非撤退は永く兩國民を惱ます の問題として存せん。

何故に征服せざりし乎

最近の大著『埃及と英人』の著者ドウクラス、スラーデンは埃及に於ける英國良政の數々を列擧したる後嘆じて曰く、若し我等英人は佛人がチユニスを征服せし如く埃及を征服せしならんには如何に良かりしよ、大英國の政府と法廷とを以て之に臨まば何ぞ治外法權の要あらんや、埃及の英國に於けるチユニスの佛國に於けるが如くならんには國力は今日に倍加し國運は今日の比に非ず、而して埃及人は蘇丹人の如くに太平を樂まんにと、恐らく是れ獨りスラーデンのみならず多くの英人の然か感ずる所ならん、然も誰か知らん埃及は佛人先づ手を着けて英人の後に之を奪ひたる所なるを、印度然り、北米然り、而して北米は疾く已に離れ印度は比年流血の慘多し埃及の將來奈何、唯運命の神之れを知るのみ。

埃及を經て蘇丹に至るに蘇丹は英將の血を以て克復せし所、名は英、埃兩國の國旗の下に屬するも實は英の一版圖のみ、而して其民は大英の威力を認め大英の善政を認むる丈け其れ丈け英の治に滿足するの狀あり、埃及と蘇丹、客窓獨坐して神を曾遊の地に馳せ思を古今に通ずれ

ば感想湧くが如く千枚の紙、百枝の筆猶盡くるなきを覺ゆ、嗚呼感想深きは亞非利加最古の文明國なり。

ナイル河

埃及が世界最古の文明を誇るに足るは恐らくナイル河ありしが爲めなるべし、上下六千哩埃及はナイルに依りて榮へ、ナイルに依りて活きたり、將來も亦然らん、埃及とナイル、事餘りに陳腐なるもナイルを離れて埃及の過去なく未來なきに於て足此地に入り親しく之に接する自ら一言之に及ぶを禁ずる能はざるものあり。

水を頌して萬物の最善なるものと歌ひたる古代希臘の詩人と、世界創始の第一原因は水中に存すと唱へたる古代希臘の哲學者とは、埃及の經驗と感情とより無意識に其思想を案出したりしものならん、希臘は其初め埃及の感化を蒙ること大なりしは余等の史に就て學ぶ所、チールスの始原論、ピンダーの比喩的詩歌は唯一の大河ナイルが生命の主たる授與者たり、あらゆる存在物あらゆる文明の始原たり支持者たる埃及と直接間接に接觸したる結果自然に其感化を蒙りたるに非ざるなき乎、沙漠とナイル流域とに分れ、而して流域のみ人の住居に適する埃及は其耕地の寸壤尺地と雖も一切に洪水の厄を蒙ることあり、埃及觀光客の多くは河水氾濫の結果、或は出口なき沼澤、或は殆んど海面と連結する湖水の出現、或は沙漠と隣る僻地に響く河流の音等に就き何等深く考ふる所なからん、彼等は舟を浮べてナイル河を溯るも古蹟の外何等兩岸の風光の眼を喜ばしむるに足るものなきに失望するを常とす、彼等はカイロ橋上より世界最有名の河、比類なき不思議の河、人間の歴史上最重大の任務を果したる河を見ると雖も尋常一樣の感を爲すならん、其色は濁り其流れは緩なり、好時機に際會せざる觀光客が名河たるを解する能はざるは亦已むを得ざる所なり。

例年四月に始まりて五六月時としては七月の初旬に至るまでカイロ附近の水量は次第に減ず、若しカイロの下流十五哩に當り三角州の夏期耕作を灌漑する爲めに設けられたる貯水堤なかりせば其水線の降下する固より是より甚だしきものあるべし、防堤以下の二大支流は水落時期には兒童の遊戯場となり、運河に依り灌漑を受くる地域の外、野は一帶に乾燥龜裂し空氣は砂塵に充ち、冬期の觀光客を樂ましむる滿目の綠色は蕭條たる秋色、春夏の期に秋色を呈し、木葉は黄落して動物は生氣を失し、人畜共に悉く秋霜に鎖され、一天雲なく烈日勢ひを逞しふして太陽は生死の源たる水氣を乾竭し全土を沙漠と化せしめずんば止まざるの狀を呈す。

乾燥期の終りに至れば人體の疲勞益々甚だしく水量日を逐ふて減ずるを見ては心的疲勞之に加はり上下貧富の別なく齊しく頸を長ふしてアスアンの報導如何を待詫ぶ、水量は增加せしや、水量の增すこと例年より遲からざる乎、增水の狀況因年に類するなき乎、棉花を枯死せしむるなき乎と、斯る時しも希望の吉報は忽焉として全埃及に響き渡る、曰くアスアンの水量增加すること數寸と、次日又同一の報至るに及んで全國民始めて愁眉を開く、されど此喜びも早計に失し次日に至り減水を報じ來ることあり、曰く先の增水は大洪水の先驅に過ぎざりしと、斯く希望と失望の報交々臻ること一週或は二週にして眞の大洪水遽然として至る。

アスアンの吉報より十日又は十二日を經てカイロ府に增水の兆候あり、初め緩々たる水勢は次第に增加して濁色を呈し八月中旬に至れば增水二十呎に達して堤上を廢するに至るを常とす、若し夫れ埃及に獨特なる薰風淸快の一夜カイロ橋上を過ぎらんか、六週間前迄の音無川は水勢滔々として渦卷き、途に横ふ總てを蕩掃し、雨なく雲なく風なく電なくして二千哩乃至三千哩の奥なる熱帶地の大降雨は埃及全土に

活水の流を濫らしつゝあるを見ん、又九月下旬の頃、下部沙漠地方の小丘上より平野を遠望せんか、ナイルの二大支流と無數の運河は全速力を以て奔騰し、附近一帶の地は無邊の湖水と化し昨は沙漠の國、今は水澤の郷と爲り、人體は健康に返り人心は爽快を感じ穀類家畜總て生活の第一要素を受け、河水濁れるも以て飲むべく以て泳ぐべく、蒼色なる男の子の河畔に浴する、水汲む女子の河に臨める、バファローの首まで沈める、宛然滿足世界の活畫なり、遮莫あれ一喜あれば一憂之に伴ふ、既にして新しき心配の雲は人の心の喜びを蔽ふの時至る、言ふ迄もなくナイルの堤防は堅固なりと雖も二箇月來集積せる水量は何處へか弱點を見出して堤防崩潰の災を生せずとも限らず、蹙にアスアンの增水を待能びたる人民は今や其反對に減水の吉報を待能ぶるに至り、嘗て增水に喜憂相半したる如く今や又喜憂の間に減水の報至るを待能ぶること數日に亘る、而して平年に於ては十月に至りて洪水の危機漸く

去ると雖も、カイロ附近の水平線は其の時却て最高に達することあり、こは埃及上部の灌域に在りし水量が一時に流下し來るに困るものにして危險の最大なる洪水の終末期に於ては、ナイル河の堤防は數百哩の間八九十ヤード毎に哨兵立ち、數哩毎に水防組守りて警戒怠り無し、英人前に强制勞役を禁じたるも此時のみは之に依らざるべからず、故に今日も猶此時期には約二萬の農民を徵發して防堤の任に當らしめつゝあり、余は減水期を去る一箇月半乃至二箇月の後此國に至りたるを爲め三角州灌漑區域の青々たるを望み、又カルツームより河口に至る千八百八十七哩を下りてナイルの兩岸今を盛りと繁茂せる樹木と綠草とを見て冬の天國の感を抱きたりしなり。

斯く埃及の運命は全くナイルの水に支配され埃及の富力はナイルの流域に限らる、故に埃及政府の施すべき第一の策は水利業の完成に在り、總ての問題は水に依り解決さる、時水の法を講じ給水の量を增せば

埃及の耕作地域は擴大して幾百萬エーカーの新沃土を生じ、一年一度の收獲は二度の收獲となり、農業の發達は貿易を助長し富力を增加するは自然なり、故に古代よりナイルの水利に腐心せし君主少からず、百年前、現埃及王朝の祖モハメット、アリーの位に即くや、彼の烱眼早くも之に着け大に水利を興したるは史の證する所。

英人の占領時代となりてよりは固より最も之に腐心し年々治水及び灌漑工事に巨費を糜せり、カイロの下流十五哩なるバラージは三角州の夏期耕作地に灌漑するものなるが、モハメット、アリーの計畫に成り巨費を投じて築造せしも中途廢れて用を爲さず、千八百九十年に至り四百六十萬圓を投じて今のバラージを完成したゝ、又アスアンのダムは世界第一の堰水工事を以て稱せられ、アスアンの上流數哩なる第一カタラクトの上に在り、此ダムに依りナイルの水量を八十呎の高さに增すを得て下埃及に四時給水を爲すに足り、ダムに依り形成せらるゝ湖水の水量は二千三百四十億ガロンを計上し、之に依り夏期耕作地の五十萬エーカーを增加し、爲に國富を增すと一億五十萬圓と稱せらる、余はカイロのバラージを實見し又アスアンのダムをも目擊したるが、後者は全部花崗石より築かれ長さ二千百五十ヤード、礎石よりの高さ百三十呎、厚さは底は九十八呎、頂は二十三呎あり、水の流下を支配する爲め百八十の閘門を設く、ナイルの水の七月初頃より增加し始むるや閘門を開き、十二月一日に至り泥土の流下し水の比較的澄む頃より漸次に門を鎖す、斯くて成せる湖は二月一日に至り滿水となり、ビレーの島を始めダムの上流十哩に及ぶも其の影響を受けナイルの兩岸水深の高騰を見る、斯くて四月末頃より給水の必要を生ずるに從ひ必要の水量を流下し七月中頃に至り之を盡くすに終る、本工事は千八百九十八年に始まり千九百二年十二月漸く成りアスキトのダムと合せて費用三千二百三十七萬圓を要したりと、然もダムの水平線を更に六メー

トル丈け高めるに決し既に其の工事に着手し、一昨年は之が爲め百七十六萬圓昨年は二百十六萬圓を支出し、本年は百八十萬圓を支出するの豫算なり、此二大貯水堤を主とし年々水利事業に費さるゝの額は莫大にして本年度(千九百十一年)の豫算説明書を見るもイリゲーションに總額六百七十九萬五千圓を支出することゝなり居れり、斯くて耕作地域を増し農産物を増加せしめんとはするなり。

蘇士運河

埃及は蘇士運河あるを以て大なる意義を有す、運河の計畫は二千五百年前ヂロー帝の世に創まり後百年ダリアス一世に至り之を完成したるものを最初とし、其方向は今の眞水運河と略相同じかりしが一時荒廢に歸したるを紀元後約百年即ち二千年前羅馬トラヤン帝之を修復したるが如し、アラブ族の埃及を經略するに至りても紅海とナイルを連絡せんことは彼等の希望たりしに相違なし、然るに八世紀頃再び荒廢して用を爲さゞるに至りしをベニス人が喜望峯航路の發見に依り失ひつゝある東方の商權を恢復せん爲め蘇士地峽の開鑿に意ありしも果さず、降つて十七世紀末に及び路易十四世を始めサルタン、ムスタフー二一世、マムルク王等皆之に志し特にナポレオン大帝は技師をして測量に從はしめしが該技師は地中海と紅海との水平線を誤認し後者は前者よりも三十三呎高しとの報告をなせし爲め、流石の大膽なる大帝も實行を中止せし事實ありと聞く、斯くて時を消す四十年、千八百三十六年領事館員としてカイロに赴任せし佛人レセップは南海連絡の壯圖を實にせんとて調査に從ひ略其計畫を具して時のケーヂプ、ザイド、パシャに奏し其同意を得しは同五十四年に在り、英のパーマストン內閣は之に故障を入れしも翌々五十六年正式にサイドの許可を得たり。

許可は則ち之を得たるも資金の伴はざるあり、實際事業に着手せしは越へて五十九年の春に在り、サイドの盡力は一方ならず彼は斯業に巨額の資を給せしのみならず工夫二萬五千を毎三ヶ月の期限にて雇貸を以て會社の需要に應せしめ、又飲料水を工夫に給與する爲め四千の水桶を造り、千六百の駱駝を使用し此費用毎日八千法に上りたりと云ふ、最も六十三年十二月に至り眞水運河の新に成るあり給水の費用爲めに大に減じたり、斯くて苦心十年、千八百六十九年に至りて工事完成し同十一月十七日に埃章、獨太子、佛后其他各國皇族貴顯列席の上、盛大なる開通の式を擧ぐるを得たり。

開鑿費約一億九千萬圓、內一億二千八百萬圓は株主之を支拂ひ、殘餘は殆んどケーヂブの支出に係りしと云ふ、而も千八百七十五年迂愚なるサイドの後繼者イスメールは十七萬七千の持株を僅に四千萬圓、現在は三億五千萬圓以上の價値あり)にて英政府に賣り飛ばしたり、蓋に自己の利害より運河開鑿に反對したる英人は自己の利害に依り斯かる廉價を以て全株の約四割三分を手中に收め會社の全權を掌握するの素地を作り得たり、余は埃及に於て英人の爲せし所を檢し、其手腕の巧妙にして堅忍能く一歩に一歩を進むるの所眞に讃歎に値するを覺ゆ、時の內閣が緊急の要ありとして責任支出を爲し次の議會に之を報告して責任解除を要求し滿場の承認を得たるは人の能く知れる事實、英政治家の大局に明かなりしこと更に讃歎に値す、運河既に自己の手中に入る、東方の商權は長へに英人の手中に在らん。

運河の優勝なる地位

運河の長さ百哩、幅は漸次に擴張せられ現に二百三十呎より三百六十呎に及び水底は百二十八呎の幅を保ち水深三十一尺猶將來に於て大船巨舶を出入せしめ得る爲め幅深共に大に擴張するの計畫あり。

運河の東西通商に至大の影響あるは言はずもがな試みに開鑿以前の航路たりし喜望峰回航と運河通過との差を較するに

	喜望峰經由	蘇士經由	減少の割合
倫敦孟買間	一二、五四八哩	七、〇二八哩	四割四分
漢堡孟買間	一二、九〇三	七、三八三	四割三分
トリエスト孟買間	一三、二二九	四、八一六	六割三分
倫敦香港間	一五、二二九	一一、二一二	二割八分
オデツサ香港間	一六、六二九	八、七三五	四割七分
マルセーユ孟買間	一二、一四四	五、〇二二	五割九分
コンスタンチノープル、ザンヅバル間	一〇、二七一	四、三六五	五割七分
ロツテルダム、スンダ海峡間	一三、二五二	九、七七九	二割六分

運河通過の各國船舶は年に増加し千八百七十年代に一年二千艘以下、二百萬噸内外なりしもの八十年代の末には三千艘八百五十萬噸に上るに至れり通過船舶の増加に反比例し通過料は隨時減少し最初に一噸十三法を徴せしもの千九百六年に至り七法四分の三となり約四割一分の減少を見更に本年より五十サンチームを減じたれば一噸七法四分の一となりたる理なり、斯く通過料を減じて船主の便利延て東西通商の利を計るに拘はらず、收入は固より絶へず増加し千八百七十四年毎噸十三法を徴せし時代の收入二千六百七十三萬法なりしもの最近一昨年(千九百九年)には一億二千四萬法となり約五倍の増加を見たり、通過料の減少は毫も會社の收入に影響せざることは從來の計算表を一讀せば直ちに了解すべく、一昨々年六月の總會に於て會社總裁アレンベルヒ公の言ふ所を見るに曰く『通過料の減少は毫も恐るゝに足らず諸君は記憶せん、最近千九百三年に五十サンチームを減じたるも一年以内に收入を恢復し、千九百六年に七十五サンチームを減じたるも二年以内に恢復したり、今後更に減料するも何等恐るべきを見ず』と、

運河は又千八百八十八年十月君士坦丁堡に於ける關係列强の協議に依り會社の租借期限内のみならず期限後と雖も中立地たるべきを協定したるに依り何等政治上の出來事の爲め影響を蒙らず、論より證據爾來世界の各所に諸種の事件あり戰爭あり革命ありしも運河は年々に收入を增加するの外何等の惡影響なし、千八百八十二年アラビの亂に當り運河破壞の威脅を受けし年に在りてすら收入は其前年より增加すること九百萬法に及び、近世の大戰役たる日露戰爭中の千九百四年に在ても千三百萬法の增收を見たり。

世にはパナマ運河其他新航路新交通機關の發見、發明に依り影響するなきかを疑ふものあり、然れども余は否と答ふるに躊躇せざるものなり、假令パナマの開通を見るの曉に於ても蘇士は依然歐洲と亞細亞間の最短通商路たるは言ふを俟たず、之が影響を受くること意外に少なからん、近き將來に於てバクダット鐵道の完成すべきあり、露西亞及波

斯を通して歐洲より印度に達するの大鐵路も既に計畫中に屬するを以て幾十年の後には遂に實現せらるべし、然れども此等の鐵道は之に隣れる諸邦の貨物を吸收し又旅客の幾分を吸收し得べきも日夜運搬せらるゝ東西貨物の交換は依然水路に據るべく、陸便は船便の廉なるに競爭すべきに非ざるは西比利亞鐵道の開通が何等の影響を與へざるに依りても知るべく、或は空中飛行船、飛行機其他新發明の交通を便利にし改善するもの將來多々益々多からんも主なる貨物の輸送は依然水路に依らざるべからざるに於て蘇士の前途は唯だ光明あり希望あり、況んや漸く開發の緒に就ける支那大陸其他に於ける亞細亞の富力の年に月に增大するあるに於て世に運河會社程の好會社あらんや、會社は千八百八十三年の總會に於ける決議に依り二割五分以上の配當を爲さざることゝせるに拘はらず、千九百四年以來二割八分二厘の配當を爲し來れるが如く、利潤の莫大なるは五百法の株が約五千法に

上れるを以ても之を知るべし。

租借期限の延長問題

余は既に運河の小史と會社の有望なるを略述したり、然れども此等は茲に余の言はんとする主題に非らず、余の言はんとするは一昨年來會社當局者と埃及政府との間に陰かに協商の歩を進め略政府の容るゝ所となり、之を大會議に諮り大會議は委員を選出して之を調査したる結果、昨年四月に至り一に對する六十六の割合を以て滿場一致之を否決し去られたる運河會社租借期限の延長問題是なり。

蘇士が東西の咽喉に當り通商上政治上至大の關係あり、運河會社の利益莫大にして世界既成諸會社中の最有利なるものなるは之を說くには餘りに蛇足なり、斯くの如く至大の關係あるが爲め租借期限の延長問題は少しく志を當世に抱くの士の何人も知らんと欲する所なるべ

し、余カイロに在るの日、之を官憲に質し之を書冊に閲し之を輿論に聞き略其要を得たり、首相ブートロスの一青年イブラヒム、ワルダニなる者の刺す所となりしも近因は實に此問題に關す。

四十年間の延期

現會社の蘇士地峽使用は千八百五十六年に埃及ケーヂブより允許せられたるものにして來る千九百六十八年十一月に至りて盡くるもの、之を更に二千八年十二月に延期せんとせしなり、而して會社當局と埃及政府間の此問題に關する協商は一昨秋に至りて大臣會議に上り熟議の末、大なる修正を加ふるなくして可決し、同時に政府はオルガミッグ、ローに依り此問題を大會議に諮問するの義務なきに拘はらず、埃及の現在及將來に亘る重大事件なるが爲め先づ大會議の意見を徵するを恰當とし、昨年二月大會議の召集を爲し大會議は委員を設けて之が

調査を爲さしめたるに委員は該問題の拒絶すべきものたるを縷々報告する所あり、四月七日に至り大會議は其調査を正當と認め一に對する六十六の投票を以て拒絶の決議をなせり、其提案の大要を記せば、

一、埃及政府は蘇士運河會社契約期限千九百六十八年十一月十七日（此日以後會社は埃及政府の手に移る筈）を四十年四十四日の延長を爲し二千八年十二月卅一日となし、此延長期間運河の利益は双方に平分配當すること。

二、期限延長の報酬として會社は又千九百十一年十二月十五日より向ふ四ヶ年間に四千萬圓を政府に提供し、千九百二十一年より同六十八年に至る間は年々の總收入の四分乃至一割二分を政府に支拂ふこと。

三、千九百六十九年以後埃及政府は三人以内の代表者を運河行政會議に列席せしむること。

等に在り最後に此協商は會社株主總會に於て可決せらるゝに非らざれば有効ならざる旨を附しありたり。

政府は何故に此問題に熱心せし乎

運河會社の契約期限は猶六十年後の遙か未來に在り、政府の立場よりせば契約期限の短縮をこそ希望すべきに何故に今日に於て更に四十年延長の議に耳を傾けしか、外觀よりせば頗る解すべからざるが如きも財政顧問の本年度豫算に關する覺書を一讀せば其財政上の理由に存せしや明かなり、ハルペー顧問は現在埃及に於ける必要の施設を盡ふせんには是非共更に確實なる財源を要す、此協商にして成らんか政府は近き未來に於て莫大の財源を得る筈なりしも大會議の拒絶となりし爲め今や埃及財政は依然孤立無援の地位に沈まざるを得ずと云ひ、ゴルストの報告に據るも「契約期限延長に對する報酬額は不確實な

る將來の增收を見込みての計算に依れるものなるを以て會社側に取つては頗る投機的分子を含むも政府側の爲めには言ふ迄もなく利益ある提案たりしなり、然るに拒絕の結果を見たり而して拒絕に關する報告には明かに政府の誠實なる計畫に對し全然信用を置かざるを示せり」と、然り埃及の輿論を代表すと見るべき大會議は滿場一致を以て拒絕を決議したるに依りてゴルストの言の甚だ然るを認む、然らは調委員は如何なる報告を爲せし乎。

調査委員の報告

彼等は昨年二月十二日第一會を催ほし先づ提案の內容を調査し政府委員の出席を求め又財政顧問の覺書を審査し、此提案を爲せしは政府にして會社側に非らざるを發見し何故に政府は猶六十年の長日月を前途に控ふるに拘はらず期限の延長を今日に於て定めんとせしかに

想到し、一々詳細の調査を爲し該提案の政治上の理由に基つくや否やを檢せしも既に千八百八十八年十月廿九日の君士坦丁堡條約が運河の嚴正中立を規定せる以上、何等政治上の理由に基つくを發見する能はず全く財政上の原因に歸するを看破し、次に大會議は此提案を修正するの權なき以上、之を可決するか否決するかの外なきを知り、果して可決すべきものなりや否決すべきものなるやに就き更に詳細の調査を遂げたるが如し。

十三億圓乃至二十四億圓の掛引

會社は更に運河の幅を廣くし底を深ふするの必要あり之が爲めに社債募集の必要あり、契約期限を延長するは社債募集に多大の便利を與ふるや明なり、且つ必然の結果として株券は更に騰貴し、利潤は增し配當を增加し、會社側に至大の利益を附與するものなるを發見したり。

尚に一昨年十月此議の坊間に傳はるや直に運河の株は二百五十法乃至二百七十五法を騰貴し埃及人の意向の否決に傾けりと見るや四十五法乃至百六十法の下落を見たるの事實は明に會社側の有利なりしを證す。

然らば如何なる損失を政府側に於て豫想すべき乎調査委員は財政顧問の疑問を基礎として之が計算を爲したる結果財政顧問の計算の基頗礎る其當を得ざるを發見したり、財政顧問は一昨年の收入を一億二千萬法としたるも委員は一億二千四百萬法なりしことを會社會計簿に依り發見し得、一昨々年の支出は四千七百萬法なりし爲め、純收入七千三百萬法と算せしを委員は七千七百萬法ならざるべからずとし、而して支出算定の基礎たる四千七百萬法は運河の政府の有となるに至らば大に減少すべしとの意見を有し、第一、從來支出の最大項目たりし千七百萬法は社債償還に充てられたるものたる以上、契約期限の盡くる迄に此費目は消滅し去るべきものたること、第二、利子支拂及配當金に充てられたる千百萬法も政府の有に歸せし以後は當然消滅すべきこと、第三、約六百萬法は法定の豫備金及材料の代價として算せられたるものなること、此の如き費目は千九百六十八年以後に計上するを要せざるものなるを以て純支出は千三百萬法を出でず、而して年々の增加經費の割合を從來の比例に依りて計上するに六十八年に至り千二百萬法を增すものとせば二千五百萬法の總支出を要すと見は至當ならん、如何となれば千八百七十年に支出八百萬法なりしもの四十年後の千九百八年には千三百萬法にして五百萬法を增加せしのみなるの事實あるを以てなり。

之に反し運河の收入は其增加の度甚だ高く昨年一月より三月末に至る三ヶ月間に於ける收入は二千六百十二萬法にして一昨年の同期間に於ける收入二千三百萬法一昨々年の二千萬法に比し著しき增加あ

りしを見るべし、而して此傾向は將來益々然るべく、如何に通過料を減ずるも如何に低く見積るも年に三百萬法宛の增加ありと見るを得べし、何となれば現に昨年の三ヶ月間のみにて三百萬法の增加を示し居ればなり、委員は斯く會社の報告其他の材料に依り精細なる假定計算を爲したる末、彼此收支を差引し左の如き數字を上げたり。

一、千九百十年より二千八年に至る每年の收入增加平均三百萬法とせば二十四億千十七萬圓

二、同年間に於ける年々の增收を二百萬法宛とせは十五億六千五百九十八萬圓

三、千九百十年より千九百六十八年迄の年增收二百萬法千九百六十八年乃至二千八年迄の年增收一百萬法とせば十三億五百九十八萬圓

即ち政府は多くは二十四億一千餘萬圓、最低の財政顧問の假定計算を基礎とするも十三億餘萬圓を失ひ會社は同額を利得するものたるを明にせり。

將來の豫想

從來の收入を基礎として算出せられたる結果は斯の如く政府に不利にして會社に有利なること明白となりたるも將來は果して過去の如く有望なるべきか、之に關し財政顧問は第一、一噸五法迄通過料の減少を見るべきこと、第二、政府が今日會社と此協商を爲さゞれば政府の利益を減ずる爲め契約滿期前に多大に通過料減少を企つるの虞あること、第三、パナマ運河は蘇士と競爭するに至ること、第四、科學の進歩に從ひ交通機關の發達、發明は運河の價値を減ずること、第五、運河が政府の有に歸する曉に於て列國は政府に迫り通過料の大減少、甚しきは運河の自由航行を主張するに至るや測られざること等を列擧して財政上

の理由以外に加へたり、而して委員は一々之に就き考慮を加へたる末
全く反對の決議に到着し、通過料を減ずるも收入に影響なく、パナマ運
河其他交通機關の新發見も何等差したる影響なく、又如何に列國が自
己の利害に關係すればとて人力を以て開鑿したる運河の無代通過を
主張せざるべく、若し强て此に至るとせば列國は相當の代償を爲すべ
きことを論定し、或は現會社との契約期限滿了の後には他の機關に之
が經營を委託するも亦政府の勝手たることを言ひ、縱横に政府側立案
の杜撰にして而も國民に大損害を與ふるものなるを痛說し、最後に委
員等は大會議が斷然たる反對の態度を以て之に當らんことを附言し
たり、而して大會議が委員會の報告を是認し滿場一致を以て否決した
るは前述の如し。

政府の言ふ所正しきか、大會議の言ふ所正しきか、余は茲に確言する能
はず暫らく後の說を待たん、唯少くとも埃及人中の心あるものは此提
案を以て自國の浮沈に關する重大事件なりと爲し之に對する政府反
對の氣焰は遂に無心の一青年を驅つて首相暗殺の兇擧に出でしめた
るは不祥の出來事と云ふべし。

奇なる死の宣告

茲に前首相の橫死に關して起りたる興味ある事件二あり、一は死刑の
宣告文に對しマホメダン大法官は基督敎徒首相は埃及人なるもコプ
ト族にして即ち基督敎徒なりを殺すも回敎法律は其兇行者に死の宣
告を與へずとの理由を以て之に調印するを拒みしこと其一なり、他は
曩にデンシャワイ事件の際法官として被告を裁判せしヘルパウ、ベイ
なる者が輿論の攻擊に堪へざりしか或は他に威ずる所ありしか、後幾
くもなくして官を辭し身を國民的運動の群に投じ一昨年に於けるゼ
ヤバ府の埃及人大會議に同趣味の徒たることを明にせしが、此事件に

就て彼は兇行青年ワルダニの辯護人となり法廷に於て一場の慷慨演說を爲し、愈々死刑と決するや直に馳せてワルダニを牢獄に訪ひ聲を勵まして『大膽に從容として死に就け、今日ならずも明日死の宣告は汝に至るべし、而して之を打消すは不可能なり、往け矣、往いて神に其事實を語れ、我等の心は汝と共に在り、我等は永久汝に同情の涙を濺くべし、往け矣、汝に對する死の宣告は汝の國と人とに大なる教訓を與へたり、汝の死は徒然に非らず』と告げたりと、當時彼のワルダニを勵ましたる句は直に印刷せられ全國に普ねく配付せられたれば何人も知了する所なりとは某埃及人の贈據物件を示して余に語りし所、斯くて此青年は埃及人の仲間に第一番の殉難者として追慕せられつゝあるなり。

尼兒江上歲晚（ナイル）　胸裡何曾留俗塵
優遊天下泰平民

埃及

征旅未終年又暮　將迎三十五回春
迎新年
故鄕回首萬三千　身在尼兒河上船
盛暑如炎汗若涌　白衣赤酒迎新年

蘇丹

一月六日 カイロにて

埃及より蘇丹＝波蘭の貴族＝紅海の三晝夜＝マルタの技師＝余はアリー＝蘇丹の出口＝ポート、スーダンとカルツーム間＝カルツームの五日間＝カルツームとオムヅルマン＝總督官邸の一夕＝蘇丹の現狀＝蘇丹開發會社＝沙漠鐵道＝ナイルの下江二百十四哩＝ビレー島＝アスアンのダム＝古埃及帝國の首都

埃及より蘇丹

下埃及より蘇丹に入るの途二あり、一はナイル流域に沿ひ一部は汽車に依り一部は汽船に依りて首都カルツーム達するもの、他は蘇士より紅海に浮びポート、スーダンに上陸、其れより汽車に依るもの、余は往路を紅海に取り返路をナイルに依りたるが、此一周行程二千八百二十一哩にして最短最捷の道程なり、カルツームはナイルの河口を距る千八百八十七哩、若しナイルを上下せんには少くも三千三百哩を踏破するを要するなり、カルツーム、カイロ間接續急行車船、冬期は毎週三回、紅海を經るものは毎週一回、幸ひ今年より蘇丹政府とケーヂプ、メール、ラインとの協商成り、一周切符發行さるゝことゝなれるを以て余は此の便に依らんと欲し、去る十二月二十一日午前十一時を以てカイロを發し駛走百四十八哩、後五時蘇士に着し直ちに連絡船プリンス、アベス號に投ず。

波蘭の貴族

カイロより同乘の客二名、一は六十六歳の老人にして伯爵、他は四十餘の壯歳にしてクラカオ大學醫科の教授、共に波蘭人なり、老人は今を去

る四十六年前即ち蘇士運河の開通前、セイド死しイスマール位に即くの翌年を以て此國に來遊したるとある漢にして當時アレキサンドリヤとカイロ間に新に鐵道成りしのみ、カイロよりルクソウ(上埃及の商業並に考古上の中心)に至るに七週間を費やせしと、又三角州一帶にも水利の計畫未だ成らざりし際とて見渡す限り沙漠なりしと語れり、彼れは明年を以て本邦にも遊ぶの意あるが如く頗るの快男子なり、言ふ迄もなく在埃外人中數に於て最多を占むるは以太利人、希臘人にしてアラビヤ族は即ち埃及土人を意味し、佛人は英人と共に此國兩頭政治の相方たりしもの、船中の掲示の如き英、佛、以、希、アラブの五國語を以てせる自ら此國人種の分野を示せるを覺ゆ。

カイロよりイスメリヤに至る間は疏水通じ田園開け人家稠密し光景殷賑なるもイスメリヤと蘇士間は荒凉たる沙漠にして遠くアラビヤ沙漠と相連るもの、車窓近く運河を往來するの船舶を望みレセップの

雄圖を思ひ、更に羅馬トラヤン帝以後歴代の運河計畫者を回想するの情に堪へざりき。

紅海の三晝夜

船間もなく抜錨し八百二十四哩を南航して二十四日十一時ポート、スエダンに着せり、紅海の三晝夜は地中海の航海の其れにも增して波穏かに氣温、今來稀なる安息保養の機を得たり、唯乘客の多くが餘り上等ならずして波蘭亡國の民の外に談敵なく船内の設備甚だ粗末なりし事、聊か此行を不愉快ならしめしのみ。

煙は鎖す亞剌比亞、海雲は迷ふ亞非利加洲、げに西に亞非利加の赭山を標渺の間に眺め遥に亞剌比亞の沙漠を水天の東に望むの處、舷頭長椅に凭りて讀書し倦み來れば一睡天國に遊ぶ、波は靜にして船平地を往くが如く微風徐に凉を送りて初夏の候に似、心廣く體胖かに胸中何等

の塵を留めず正氣五大に滿つるを覺へしめたり、若し夫れ夜深き時獨り甲板に上れば片月漸く東より出でて、海波を照し天上の月と舟裡の我と乾坤は唯二者の有たり、氣澄み興到り覺へず高聲蓋世の歌を唱ふるに亡國の六十六歳翁階下より昇り來りて余に近づき何の意の詩歌ぞと問ふに、余は愛國の歌なりと答へたれば彼は頗る首肯しつゝあるものゝ如かりし。

二十二日の夜よりは暑氣加はり日中は船員皆白衣を纏ひ、夜に入れば船室悉く煽風器を用ひ卓上の西瓜と蜜柑と身邊の蠅とは熱帶圏に入りつゝあるを感せしむ。

マルタの技師

室を同ふせしはマルタ人にして機械師たり、七十五年前其祖父の時代に一家擧つてアレキサンドリヤに移住したる者埃及の產なり、風采粗野なるも好人物にして、余はプリチシユ、サブゼクトにして埃及人に非ずとて昂然たり、蓋し外人の此國に在るもの治外法權を有するを以て如何に永住するも埃及に歸化するが如きことなく子孫相享け自國の國籍に在るものと見ゆ、彼れ初め余の日本人たるを辨せず君は獨逸人かと問ふに對し『否、余は日本人なり』と答へたるに、床上の彼れはオーと叫びつゝ直立して握手を求め余は始めて日本人に會せしを以て貴下の日本人たるを知らざりし、日本人は軀幹小なりと聞けるに貴下は余と體格西歐し頗る大なり、日本人は然か大なるや抔と奇問を發し且切りに日露戰爭を云々し、東郷、大山等の名を稱し日本を激賞するも可笑、君府とアレキサンドリヤ間船室を同ふせし希臘人も切りに手を以て打つ眞似し日本は强しと云へりしが、彼等は日露の戰に依りて我名を知りしもの、亞非利加の中央たるカルツームの小學生徒も能く東郷の名を記憶せり、戰に依りて知られたる名は必ずしも喜ぶべきに非ず、

文明の日本、富國の日本の世界の邊陬に知らるゝの日は猶遠き未來なるべし。

余はアリー

舟既にポート、スーダンの棧橋に着す、乃ち行李の檢査あり武器の外携帶物の檢査極めて寛大停車場と云ふもプラット、フォームの設けなく倉庫の一部を以て手荷物の置場とし佇立して發車の時刻を待つの外なし、然るに發車は午後二時なれば約三時間の餘裕あり、乘客依然甲板上に涼を納れつゝあるを以て余も再び船に歸り一瓶の炭酸水に渴を醫するに偶々袋裡小錢を拂ひ盡くし一厘なく金貨を給仕に與ふるも船の會計吏既に上陸して釣錢を得る能はず、此狀況を目擊しつゝ側の椅子に凭り小酌せる一小英人突如聲を揚げて曰く余は君の爲め之を支拂ふべし、余は君のアリーなり、アリーの爲め微意を致すは余の樂む所にして君の諒せらるゝ所ならんと、其の始めアリー、アリーと呼ぶに何の故なるを解するに苦しみしがアライ即ち同盟たると判明せり、余は之を固辭し百方釣錢を他に求めしめて之を得、以てアリーの惠に浴せずして勘定を濟まし得たり、大抵の英人は沈默にして見ず知らずの客に對し斯る事を提言するものに非ざるに蕃地に在住する身の自から旅の情を解するに至りしものか笑止の至りなりき。

蘇丹の出口

蘇丹の出口として英人曩にスアキン港を選びスアキンを起點として、アトバラに至る三百五哩の紅海ナイル連絡鐵道を建設せしも後に至りポート、スーダンの良港灣たるを發見し出口を茲に移し港灣を修築し、水陸運輸の設備を完ふしたり、一見する所敢て良港と云ふ能はざるも、能く巨船を棧橋に横附けするに足り幾條の鐵路埠頭に延長せられ

運搬機械、倉庫等も略備はり既に一角の體裁を具せり、是よりアトバラに至る三百一哩、急行車に投ずれば十五時間にして達すべし、余輩に此地よりカルツームに至る寢臺車の一等をレザーブせんことを通告し置きたるに拘はらず、乘客意外に多くして二臺の寢臺車二十餘の寢室に一箇の空位を剩さず已むなく一等普通車の一室を獨占して之に據る、室は歐洲の諸鐵道よりも却て廣く、沙塵を避くる爲め窓の上半は木板を以て之を蓋へる爲め稍陰氣なるも、煽風機の備へありテーブルあり戸を閉ぢて久し振りに白晝洋服を脱し浴衣一貫となりて横臥し、煽風機に凉を納るれば身の遠く深く漠中に在るを覺へざるなり。

ポート、スーダンとカルツーム間

加ふるに食堂車の洋食は以て腹を他かすに足り流石は英人の新經營地たるの感を起さしむ、二十五日未明既にアトバラに達するに四臺廣

漠泥々たる平沙の外一物の認むべきなし、キッチナル將軍が蘇丹克復軍に將として此地に進軍しカリフアの兵を破りし事は十二年前に屬す、ゴルドンの市に近くに從ひゴルドンの記念多く、古フング帝國の都市たりしセンディに至りナイルの對岸メテムメを望みゴルドン救援軍司令官ウースレー大將の戰勝抔思ひ浮べつゝ、沿道漸く椰子樹繁り人煙揚がるを左右に眺め正午を過ぐる十五分北カルツームに着す、一箇月前新に鐵橋成りし爲め進んで青ナイルを渡り同四十五分ゴルドンの市は中央停車場に下車するを得たり、ポート、スーダンより此に至る四百九十一哩、二十二時間にて達したるなり。

カルツームの五日間

カルツームには五日間の滯在を爲せり、カルツームは所謂ゴルドンの市、ゴルドンの記念に就ては別に述ぶべく之を外にして見るべきもの

猶甚だ饒し、クック社極めて企業に富み舟をナイルに浮べて旅客の觀光に便にす、五圓を拋てばグランド、ホテルの河岸より坐してマヂー及カリフア十有四年間の蘇丹王國の首都オムヅルマンに至り、仔細に其跡を弔ひ兼て黑人部落の光景に親炙するを得べく、六圓を投ずればケレリーの戰場に至りキツチヲル軍の作戰を回顧するを得べく、更に四圓を投ずれば青ナイル十五哩にアロアの舊基督國首都の廢墟を一瞥すべく、二圓五十錢にてゴルドンの市の大觀を了し得べし、カルツームの觀光は三日にして足る、然れども金あり時あるの士は更に南に長征して鰐魚、河馬を水に獵し猛獅子巨象を陸に射るを得べし、驚く勿れ汽車も亦此地より更に二百哩の上流なるセナルの地に通ぜるを、汽車にてセナルに至り歸路を白ナイルに取るも亦一興なり、ゴンドコロは此を距る南に一千五十九哩、冬期は毎月一回の便船あり往復二十五日間六百五十圓を投ずれば船客たるを得るなり、ゴンドコロは英領ウガンダの最北端に立つの市、其れより或は陸行或は水行してヴヰクトリヤ湖畔のエンダベに出で、エンダベよりフロレンス港に渡り其れより東部亞非利加鐵道に依りモンバサに至るを得べし、カルツーム、モンバサ間日數約六十日、二千四五百圓を投ずれば此行を遂ぐるを得べし、此行程は幾にルーズヴエルトの敢てせし所、余もカルツームより更に埃及に引返すの惑なるを思ひ長驅してモンバサに出でんと欲し英京に在るの日之に就き聞く所ありしが其詳を得ず、埃及に入りて始めて大體を知了するを得、錢を要すること多き割合に利益を得る尠なかるべきを思ひ初一念を拋てり、鯨鰐獅、象は皆な我友何等恐るゝ所に非ざるも幾中頗る冷なるを奈何可々。

カルツームとオムヅルマン

カルツームと北カルツームは青ナイルを隔てゝ相對しオムヅルマン

はツチ島を隔て白青兩ナイルの合流點より河岸に沿ひて北に擴がる三哩半、カルツームの一萬八千三百、北カルツームの三萬五千三百、オムヅルマンの四萬二千八百を併せて約九萬六千四百とは一昨年末の計算なり、今は十萬餘に上れるならん、カルツームを政治的歐人街とせば北カルツームは工場地にしてオムヅルマンは土人街なり、官衙、官舍、學校、醫院、兵營等は多くカルツームに在り、北カルツームには工場倉庫の類多く煙突の數五六を算ふべし、若し夫れオムヅルマンに至りては僅に一水を隔つるも猶是れ純乎たる亞非利加の土人街、黑白截然として相別る、茲に此機に於て少しく三市の生立を述べんに、カルツームは千八百二十年より三十年の頃モハメット、アリーが新に領土を此方面に擴張し地形の『象の鼻』に似たるよりカルツームと命名せしもの、地の青白兩河合流の所に位し形勝を占むる爲め埃及より亞非利加の中部に入る貨物の集散地として急速に發達し、ゴルドンの龍城前には既に

七萬の人口を有したりと傳へらる、マーヂの反亂に際し在蘇の兵を引上げんとするや將軍ゴルドンを派して其任に當らしめ、將軍の二度目に此地に入り總督の印綬を帶びて白宮宮裡の人となりたるは千八百八十四年二月の事にして翌年一月二十六日職に斃れたるは世界の耳に猶新なるの悲劇、カルツーム一旦マーヂの手に歸し全市沙漠と化せしも千八百九十八年オムヅルマンの克復と同時に更に新市街の計畫成り、白宮も依然として河岸に在り、克復軍の隊長キッチナル先づ總督となつてゴルドンの市を繁榮ならしむるの道を講じ參謀長ウヰンゲート次で隊長の後を襲ふて總督となり、爾來十有一年カルツームは再び英埃領蘇丹の首都となり日に殷賑に赴きつゝあり、北カルツームはカルツームの對岸に在りカルツームの繁榮と相待つて工場地として益々發達すべきは自然なり、オムヅルマンはマーヂ新王國の首都として千八百八十四年マーヂ、モハメット、アメットの創建せし所、彼れはゴ

ルドンの死を去る僅に五箇月にして病歿し、カリフア、アブダラ之を繼承して十四年間虐政の中心たり、市はナイル合流點より左岸に沿ふて北に擴がる三哩半、市の規模は十萬以上を容るゝに足るも現在の人口は四萬餘を出でず、舊堡壘前に上岸しマーヂ、カリフア時代の遺跡を弔ふて中央市場に出づれば裸體のバガラ族を始めヌバ、カバビシユ、ゴワメー、コワレー等のアラブ族を始めヌビアン、ヂヤーリン、ブエラヒンの族もあり、少數のアビシニヤ人コプト族之に混じ白人としては約一百の希臘人と十數の英人あるのみ、市場の光景は人をして初めて亞非利加の中心に入りたるの感あらしむ、四顧皆な黑奴眼の光鋭く齒の極めて白きが特に際立ちて見ゆ、店頭に立つてマーヂ軍卒の用ひし槍劒の類を購ふに一遜卒あり始終追行し來る、暗に余を護衛しつゝあるものと知らる、然も黑人は從順にして何等の危險なきは勿論なり。

ガリフアの舊居に面して廣場あり舊居の棟上より四望すれば全市を俯瞰すべく、ゴルドンの住みし白宮宮上に飜る英埃兩國旗は雙眼鏡に依りて望見すべし、マーヂが之を目標として砲擊せしも左こそと思ひ出さる、廣場に隣れる彼のトンブはキッチヤルの命に依り之を破壞し去り今は其廢墟を存するのみ。

總督官邸の一夕

二十八日の夕招かれて總督官邸に至る、坐する所はゴルドンの居りし所謂ゴルドンの室、對するの人はゴンドン救援軍の參謀長たりしの人、食前此人に導かれて庭園を散歩しキッチヤルの畑を經て貯水池畔に至り又引返してゴルドン手植のバラ樹の下に立つ、總督手づから其花一輪を折りて余に贈らる、香氣馥郁たり、之を釦穴に挾みてゴルドンを偲ぶ亦言ひ難きの情あり。

總督年齢五十餘、體軀餘り大ならず英人としては小男なり、溫乎たる風

采人をして近づき易からしむ、余は總督に於て重ねて英國紳士の一模型を見たり、總督はカリファ以下の首級を揚げし人當時の戰況を語る掌を指すが如く明かに、初めてカルツームに入りし際は全市一面の沙漠にして總督官邸の如き見る影もなくゴルドン手植の薔薇も漸くゴルドンに親炙せし生殘りの賤卒に依り之を知るを得たる位なりと云へり、總督はシビル、ローに依り蘇丹九十五萬平方哩の域を統治するも埃及軍の總指揮官即ちシルダルを兼ね必要に應じて兵を用ゆべく、總督の命令は即ち法律たり文武の全權を一身に擁す、蘇丹の國情は此制度を必要とするものと知らる、總督は亦キッチナルより日本朝鮮の狀況を聞取して一遊の念禁じ難しと云へり。

總督を外にして是非共一會したかりしはインスペクトル、ゼネラルたる英國名譽陸軍少將スラーチン、パシャなり、彼は墺國人にして二十八年前即ちゴルドン將軍の死に先ち西部蘇丹の邊域に官しマーヂに捕へられ、囚徒としてオムヅルマンに送られ鐵鎖に繫がるゝ十有二年、弱ら回教徒に改宗したりと稱し朝夕四圍其群に混じて祈禱を爲し僅に生を全ふし、千八百九十五年に至りカリファの目を掠め身を脱してハルツァに逃るゝを得たるの人、土人の事情に精通し蘇丹の治政に缺くべからざるの材たる爲め、英政府特に彼に授くるにインスペクトル、ゼネラルの職を以てし、英帝は彼に賜ふに名譽少將の軍官を以てし墺帝は彼を男爵に叙したり、彼は生きたるマーヂ、カリファ十有四年間の歴史なり、然も余の滯在中は地方に出張して在らず遂に其人を訪ふて其經歴談を傾聽するの機を逸したるは遺憾なりき、スラーチンの外當年を記念するもの少からず、マーヂの子孫も多く生存し其幼なるはカイロの學堂に遊び、ゴルドン、カレージにも一名あり、ゴルドンを殺せしマーヂの子がゴルドン記念學校に遊ぶも亦文明の餘澤か、而して茲に最大の記念物は元の奴隷大王ヅーベルなり、埃及政府の奴隷賣買禁止を

標榜するや義理にも彼をその爲すが儘に放任する能はず彼を控してカイロに幽し、其子の兵を擧げて抗するに及びゴルドン部下の一將は之を殺せり、後グラッドストーン内閣の蘇丹撤退を主張するやゴルドンをして之が任に當らしむ、ゴルドン任に總督に就きマーヂの勢力侮り難きものあるを看取し、直にカルツームより電報してヅーベルを蘇丹總督とするは蘇丹に在る埃及人及兵士の引上げを完了し蘇丹を治むるの唯一の方法なるとを稟議したるも、優柔にして迂遠なるグ内閣は小康の名を得んと欲し拒んで容れず、遂にゴルドンを殺したるのみならず蘇丹を放棄してマーヂ及其後繼者の虐手に委すること十有四年の久しきに及ぶを致せり、ヅーベル今や八十餘歳の頽齡なるも鑠鑠として鞍上顧盼の勇あり現にカイロに在りとは總督の余に語る所、ゴルドンに親炙し御用商たりしボルダニー、ベーも亦カイロに在りと聞く、總督官邸一夕の清話は余をして二十五年前の出來事を回想してゴルドンと語るの感あらしめたり。

蘇丹の現狀

蘇丹の總督を叙するの序に於て其現狀を略叙するは至當の順序なるべし、モハメット、アリー起つて蘇丹を征服しカルツームを首府とし漸次版圖を擴張すること六十年、一時マーヂ及カリファの爲め其施政中斷せしも千八百九十六年に至り克復軍を發し翌々九十八年九月二日オムヅルマン陷落し其翌九十九年十一月カリファはゲデキト附近の戰ひに斃れて全土平定に歸せり、斯くて千八百九十九年一月十九日カイロに於て調印せられたる英埃兩國政府間の條約は蘇丹の今日に於ける地位を決定し、北緯二十二度以南九十五萬平方哩の域を英埃領蘇丹と稱し兩國國旗の下に立つことゝなり、總督は英政府の推薦に依り埃及王の任命する英國將官を以て之に充つることゝし、此英人總督は

同時に埃及軍司令長官即ちシルダルを兼ね、總督の發する命令は法律の効力を有す、埃及よりの輸入品には課税せず、紅海よりする諸外國の貨物には埃及に於て課する税率以内の課税を爲すことゝし、一旦解きたる奴隷の輸出入を禁じたり。

蘇丹の人口はマーヂの虐政十有四年の間人を屠ること獸を屠るが如く加ふるに饑饉に次ぐに惡疫を以てし、曾て八百五十萬を算せしものゝあり。

克復軍の入込みし當時は二百萬に滿たざりしと云ふ、然るに平和の十年は人口の激增を來たし今や二百四十萬に上り、猶月に年に增加しつゝあり。

地方の安寧は交通機關の進捗と軍備の普及と相待つて漸く緒に就き、マーヂ及び其後繼者の虐政の下に呻吟せし土民は英人の治政に悅服し南部の大半は猶未開の儘なるも北部地方は大に活氣を呈し、埃及棉花の移植は好成績を示し農業開發の爲め希望者に土地を貸與するの

擧は一段の企業熱を增さしめつゝあり。

土地丈量も漸次に進み土人保護の政策も確實に其歩を捗り、土人は州知事の許可なくして其土地を他に賣却する能はざることゝなれり、域内を十三州に分ち各州の知事には埃及軍に備聘せられ居る英國士官を以て之に充て、州の下に郡あり、郡長は多く埃及人士官にして英人監督官指導の下に地方行政に當りつゝあり、白耳義王レオポルト二世の崩去に依りヲド地方は條約の結果蘇丹の一部となり、斯くて蘇丹は更に一萬七千方哩の新領土を加へたり、蘇丹の私法刑法は印度の制に則りたるものゝ如く又結婚相續等の事件に關しては回教法律に律せる、教育もゴルドン、カレージを中心として漸次都鄙に進捗し寺小屋即ちクタブに在るも小學生徒二千百五十名、高等小學は主要都市に六箇あり、其生徒九百、中學部はゴルドン、カレージに在りて五十名を收容し外に職工科、土木科、機械科、大工科等あり、女學校も始めてルスア市に設

けられたるを見る、要するに亞非利加の中央裸體の兒も漸次に地球の圓きを知り文明の光を浴ぶるに至りつゝあるなり。

耕作地面積は百十萬餘エーカー埃及棉花の外に小麥、大麥、稞、砂糖黍も漸次に植附けられ、千九百八年に於ける輸入千八百九十二萬圓、輸出五百十五萬圓に上り輸入の主なるは衣類、石炭、機械、鐵道材料等にして輸出の主なるは雜穀、穀類、毛羽類、椰子、棉花等なり。

水利事業は漸次に耕地の面積を增し道路も年々新築せられ一昨年のみにても一千百哩の新道の成るあり、鐵道はハルハ、カルツーム間五百六十五哩に加ふるにポート、スーダンよりアトバラに至る三百一哩、アブ、ハメットよりカライムに至る支線も數年前に成り、カルツーム以南は既にセナールを經て白ナイルのラバクに達し二百數十哩の開通を見、電線の延長五千哩を越ゆ。

英埃の治政十年は漸く蘇丹の山川をして生色を帶ばしめつゝあり、斯

くて克復當時の年收八十萬圓に過ぎざりしもの一昨年は埃及よりの補助を除き蘇丹の純收入にて千四萬圓に上り、昨年の豫算は千百萬圓豫備金は一昨年末の計算にて百二十萬圓を算せり。

總督官邸に隣れる政廳に財政部長ベナード大佐、內務部長ヒッブ大佐等を訪ふて此國の進境を聽取するに英人が亞非利加の中央に新建國を爲しつゝあるの狀を看取し得て快感頻なりき。

蘇丹開發會社

蘇丹開發會社は千九百二年の設立に係り蘇丹唯一の大會社なり、コハ此國開發の爲め政府の勸誘に依り設立せられたるものにして資本金百二萬圓、其內の五十萬圓に對し政府は設立後十年間年三分の補給を爲し又ナイル運輸を獨占し之に對し會社は軍隊の輸送には五割政府の貨物には二割五分の割引を爲すの義務あり、支配人ホームを訪ひて

其狀況を聞くに會社の政府より租借せる地域三萬エーカー内二千エーカーを既耕し棉花小麥、大麥、牧草、砂糖黍の類を耕作し、農民一百名乃至二百名を使役しつゝあるも水利に失費多く且勞銀高きに過ぎ利益少く汽船十隻を有もナイル上流の運搬に當りつゝあるも貨客甚だ多からず、設立八年を經て未だ一文の配當を爲す能はず而して株主は設立當初より配當を期待し居たる爲め社業頗る慘澹たるも、漸次に好境に向ふべく前途は樂觀し得べしと云へり。

此國開發に就き最大缺點は人口稀薄にして勞役の缺乏せると是なり、人口の稀少は勞銀をして過大ならしめ、總ての企業をして收支相償はざるに終らしむるは現時の狀態なり、此地方は黑人の勞働者にして最下級一日三十六錢次は月に十五圓、家僕の如き日に一圓乃至二圓の高給を得つゝあり、斯く勞銀の高きに加ふるに日用品は多く輸入品に係りて驚くべく高價なり、乃ち知るカルツームの諸式の埃及に比して五六割乃至十割も高くグランド、ホテルの宿賃がカイロの上等ホテルに比して四五割も高價なるを察丹は今や人口の增加を要求しつゝあり、而して土民は生命財產の安固を得て年に月に增加しつゝあるは前述の如く、人口にして增加す、政府の施設と相待つて此國の未來に光明あらしむるは確實なり。

沙漠鐵道

カルツームに在る五日間、名殘り惜しきゴルドン市を後にして二十九日夜十時發の急行車中の客となり明れば三十日身は既にアトバラを過ぎベルバー驛に在り。

寢臺車の客はスコットランド人父子と二人連れの老處女とのみ共にグランド、ホテルの客たりしもの、ホテルにてはクヅグの埠頭に至る迄燕尾若しくはダギシードにて食堂に出で、グリスマス前後のことゝて

カルツームの粋を集めたる舞踏もあり、行李をカイロに殘し此等の準備なかりし余は獨り脊廣の儘にて平然たり、然も外觀に依つて品評を事とする異人連異樣の眼を以て余を眺め、ホテルの廝丫亦日本人に接せしことなき爲めか動もすれば劣等人種視せんとするの風あるに胸中の大海時に小風波を漂はすとありしが、車上の客となりて寢臺の一室を獨占し、浴衣一枚となり煽風器に凉を納れつゝ横臥して蘇丹經略の史を繙き倦み來れば起つて窓外の大漠を望み壺中天地長く乾坤我れ獨り寛なるの概あり、快感斜ならず、且蘇丹の寢臺車は其室の廣き、机あり、長椅子あり、戸を鎖すれば何人も内を覗ふ能はず全く船のキャビンに似たるあり、其心地好き歐米の其れに過ぎ蘇丹官憲の誇りとする所、成る程塵避けの木板車窓の上半を掩へる爲め少しく陰氣なるも居心地は遙に歐米の其にも優れり、雖か十年前迄バガラ蠻族の蠻手に在りし亞非利加の中心に此の如き遊覽車あるを想像する者ぞ。

カルツームよりアブ、ハメット迄三百四十五哩はナイル灌域を北下すること丶て沿道多少の青色あり人煙あるも、アブ、ハメットよりハルハ間二百三十哩は所謂ヌビヤ沙漠にして四望見渡す限り一面の黄沙にして一青草なく一人家なく、時に丘陵の處々にピラミッド形を爲して平沙の上に突起するあるのみ、車窓より望めば沙漠は宛乎たる大海にして丘陵は小島嶼に左も似たり、余は幾回か無限に地平線上に展開する沙漠の彼方に湖水を望み幾多島嶼の水上に浮ぶを見て今度こそは水ならん島ならんと思ひ、凝視少時にして矢張り沙漠なり丘陵なるを認識するを常としたり、二百三十哩の間に十箇の停車場あり地名を冠せんにも名もなきを奈何、第一より第十に及び、第四第六の兩停車場には幸に八十尺乃至百尺を掘りて清水を得たるも他の停車場には一滴の水なく總て汽車にて飲料水を運ぶを要す、余は從來所謂沙漠と名づけられたる多くの沙漠を見たり、蒙古然り、中央亞細亞然り、アルゼリヤ

然り、チユニス然り、埃及然り、然れども眞に一望無限の概あるはヌビヤ沙漠に於て始めて之を見る、支那の詩人の所謂平沙萬里絶人煙とは此沙漠に對し初めて形容し得べきもの、キツチナルの克復軍本營をアブ、ハメットに置き此沙漠に軍用鐵道を急設せんとするや一日に能く三哩の敷設し得たりと聞く、初めは稍誇大の談として信を措かざりしに今實地に此を中斷して其の然るを得たる所以を會得せり、此鐵道は斯くて蘇丹克復軍の爲め建設せられたるもの總て軍事費の支出に係るは茲に附言する迄もなからん、カルツームより五百七十五哩三十日夜十時ハルハに着すればナイル遡航船の埠頭に客を待つあり、直に下車事務所に就き船室の番號札を得て乘船す、船員云ふ、淺瀬多きに水上暗黑なる爲め明朝未明迄抜錨せずと、乃ち第十號室に入つて眠る。

ナイルの下江二百十四哩

朝起すれば明治四十三年の大晦日、船既に發しアブ、ジムベルの古刹に近づきつゝあり、船名はスーダン、蘇丹政府の官船にして樺造楊子江上の客船の如く層々三階を爲し上等室は最高樓に在り、船頭の甲板に出で長椅子に凭りて回顧するにナイル兩岸の灌域は今を盛りと青色を呈し、水汲む女、草採る男、水上げ牛車、乃至土屋、梯子樹、ミモサ等眼底に入り來り快云ふべからざるも、河水を距る僅に十數間、數十間、時としては河岸より起つて直に一面の白沙の大漠に連るあり、ナイル上流の所謂灌域の極めて狹小なるは意外なり、灌域も下埃及に至り初めて數哩十數哩に及ぶあるのみ。

船客七八輩、中に余と卓を同ふせしは獨逸の司法官にして一箇年の休暇を得て諸國行脚の途に在るもの、日本にも四月來遊すべしと云へり、彼れ少しく訣ずるに足る、雖にはアルゼリヤ及チユニスの遊に於て獨人と同行十日、今又此漠と追隨數日ならんとす獨人我と何の緣かある、

此日は大晦日なり、然も日中は日光甲板を直射して水上風全く死し暑氣激しく久しく甲板に立つに堪へず、サロンに入りて煽風機を藉り僅に凉を遣る、アブ、シムベル、デルママダ等三千年前の古蹟を左右に眺め日既に沒し夕餐終りて靜坐す、傍の獨人云ふ、今三時間を經れば新年なりと、然も新年何等の感想もなし、母國を去つてより茲に八閲月、水陸の行程三萬哩なるも頑軀未だ曾て一服の藥餌に親まず、未だ曾て一雞に遭遇せず、日に新風物に接し新思想を湧かす、征旅未だ七分ならずして歳又暮れ常の如くに起き常の如くに笑ふて明日を迎へん、斯の如きのみ、新年何等の感想もなし、強て感想ありと云へば、數月の後には再び本の出發點たる母國の土を踏むべしと云ふ是のみ。

ピレー島

斯くて正月元旦となり屠蘇ならぬ赤葡萄の一杯を傾くる間もなく、アスアンの上流セラールに着し茲に獨人と共に蘇丹を去り小舟を艤してピレーの古址に遊ぶ。

ピレー島イリスのテムプルはナイル河畔に現存せる建築中最巧最美の稱あり、其名世界に高く、ナイル觀光客の一遊を逸せざる所、長さ五百ヤード廣さ百六十ヤード、中流に位し全島花崗岩を以て成り、建築の巧、彫刻の美は此島に關せる神話的戀物語と共に上下數千年數千萬人士が感興の種たり、之を叙せんは餘りに感興滋し、唯近年島を距る一哩餘の下流に貯水堤の築造せらるゝあり、所謂世界第一のアスアンダム即ち是にして、爲めに年の一半は河水增加し全島の岸を洗ふて殿宇の礎石に達す、若し夫れ新に計畫中の貯水堤の高さを上ぐる更に二十呎なるの日は東西稀なる此古建築も全然水中に浮游するに至らん、故に之を他に移すべしとの議あり、實益と趣味との調和こそ六ヶ敷けれ。

アスアンのダム

ビレーに遊びて此國五千年前の文化を偲び、去つて火車にてアスアンに到り午後獨人と共に土人の帆船を賃しカタラクトを溯りアスアンダムの下に到る、偶々獨皇太子妃殿下の坐乘船メーフラワー號の水道を通じて下江するに會ふ、妃殿下の一行は印度に於て太子一行に別れ歸國の途、此冬の天國に優游せらるゝものと知らる、カタラクトを輕舟にて上下するの快云ふ可からず四圍して讃嘆の聲を發するのみ。

アスアンは上埃及の南端に在り、余は蘇丹よりヌビヤを越へ既に上埃及の地に入れるなり、人口一萬五千、埃及上流最繁華の都會にして一時マーヂの亂に依り閉息したるアビシニヤ及蘇丹方面との通商も引續く治政に復活し、加ふるにナイル河畔第一の健康地たるより通商の人は觀光の客と共に此地に麕集し、各國領事も駐在し、宛たる中歐の新都

會の觀を爲せり、日本品の如きも到る所の店頭に散見す。

古埃及帝國の首都

アスアンに一泊し二日前五時獨人に別れ獨り車中の客となり正午ルクソウに着す、ルクソウは古埃及歴代帝王の首都セーベを對岸に控へカルナックの大建築は僅に十町の北に在り、市内のテムプル亦頗る宏大、仔細に埃及の古文明を探らんと欲する者は此地を中心として數月數年の日子を費さゞるべからず、埃及の古蹟は正にルクソウの四圍に在るものを以て第一とす、僅に下埃及なるピラミッド、メンフヰスを一瞥して滿足するは、餘りに觀光の意義を失す、少くとも此地に溯らざれば古の埃及を見たりとは云ふべからざらん、今日と雖も古蹟探査の事業は月に進み、新發見の報は時々の紙上に顯れつゝあり、ルクソウに着し直に驢背に依りてカルナックを一巡し、河岸に出て、ルクソウ、テンプ

ルを見又河を渡りてセーベの古址を一瞥す、人の數月少くも數日を費して僅に閲し盡す所を半日にして見了す、余も亦ピラミッド、メンフヰスを見て埃及の古蹟を見たりとするの徒と相距る遠からざるものか、然も骨董眼を肥やすは余の目的に非ず、余は未だ骨董見物に世重の時間を費す丈けに惡弥せず、見すやや死したる埃及古文明の墓邊には一條の弱木既に萌芽を生じ亭々として全土を掩ふの日の來らんとするものあるを、世界は久しく埃及人を古埃及の骸骨視したり、骨董視したり、埃及を觀光するは則ち骨董見物たりしなり、然も今や埃及人の一部は生きつゝあり、骨董國より活き出でんとしつゝあり、古骨董の見物は之を他人の業に委せしめよ、而して余をして生きんとしつゝある埃及を見せしめよ。

斯くて古帝國首都の古蹟を說き骨董を弄するは之を後の仁者に讓り、余は同日の夜行車に投じ翌三日朝カイロに歸着せり、カイロに在る更

に三日間、主に或は政廳を訪ひ學校を觀、或は農務協會に到り國民黨倶樂部に到り、生きんとしつゝある今の埃及の見學に盡夜を盡せり、埃及と蘇丹の內地を陝過する約三千哩、カルツームに五日カイロに十日の滯在をなしゝのみ、眞に一瞬の行、然も話の種は山の如し、悉く叙すべきに非ず、僅に飛脚旅行の跡を追ふに留めて詳細を叙するは他日の機會に讓らん。

入蘇丹

此行三萬里　斯體興心安
基督誕生日　單身入蘇丹
紅海夜半之感
贖書倦止立舷頭　皎月高懸獨夜舟
問盡興亡半萬歲　踏來南北東西洲

帝囚畢竟無榮辱　吳越何還問復讎
只以一誠了百事　森羅萬象皆吾儕

ゴルドンと蘇丹

十二月二十七日夜半英埃領蘇丹の首都カルツームに於て

カルツーム市＝ゴルドン、ホテルは閉店＝總督官邸＝將軍の死せし所＝將軍の一生と人格＝將軍駝上の銅像＝總督ウキングート中將＝ゴルドンとキッチナル＝ゴルドン、カレッタ＝ゴルドンの遺物

カルツーム市

余は今ナイルを溯る千八百八十七哩、青白兩河の合流する所『象が墓』のカルツームに在り、蘇丹の名は直に人をして萬里の大漠を聯想せしめ、カルツームの名は直に人をしてゴルドンを聯想せしむ、蘇丹とゴルドン、如何に久しく余の腦裡に刻まれしよ、羈旅大漠を往く以て聊か斯氣を養ふに足るもゴルドンなかりせば余は必ずしも此邊境を訪はざ

りしやも知れず、ゴルドンは余の最も憧憬せる近世の高士なり俠雄なり、ゴルドン經營の跡を檢しゴルドンの死所を弔ひゴルドンの遺物を見ゴルドンを地下に喚起して相共に語らんが爲めに來りしものと云はゞ云ふを得べけん、余のゴルドンに對する執着は此の如かりしなり而して今や之を果すを得たり。

ゴルドン、ホテルは閉店

故に去る二十五日正午此地に着するや、一黑奴を賃して行李を託し、自らは步して幅廣き砂塵立つカルツームの街を横ぎり先づゴルドン、ホテルに至る、ホテルの設備眺望共に頗る劣等なるにも拘はらず此れを選びしは唯其名のゴルドンに因めるが爲めのみ、而も屋內寂として人聲なく待つ數分にして漸く一以太利人らしきが階上より降り來り、云ふ今は閉店中なりと、乃ち已むなく河岸に形勝を占むる當市第一の大館たるグランド、ホテルに投ず、

總督官邸

河に面せる一室を占領し午食後九十餘度の暑熱を冒して先づ向ふ所は何處ぞ、問はずも知れたる總督官邸なり、官邸も河岸に面しホテルを距る數町の靑ナイル上流に在り、門に入り埃及隊の一衞兵に導かれ右側の階段を上り廊を通じて總督副官マッキントシュ大尉を見る、副官慇懃に余を迎へて來意を問ふ、余依つてゴルドン將軍の死所を弔ひ將軍の遺物を見、又ゴルドン救援軍の一士官、蘇丹克復軍の參謀長たりし現任總督ウォングート中將に謁して親しくゴルドンに就て敎を請はん希望なり然るべく取り計はれたしと答へしに快諾、余を導いて左側の階段を降り、土人軍の用ひし武器をもて飾られたる薄暗き樓下の室に立ち、仰いで其西南隅なる幅三尺に高一尺五寸位の長方形の石板を

指さす、見れば「チャールス、ジョージ、ゴルドン、千八百八十五年一月二十六日死す」の數字を刻す、コハ正しく將軍がデルビス族の槍先に屠られたるの所不朽に記念すべき點（スポット）たるなり。

將軍の死せし所

ゴルドンが英國派遣蘇丹全權使、埃及派遣蘇丹總督として千八百八十四年二月十八日萬民の歡呼聲裡に此地に入りしより孤軍重圍の中に在る三百十有七日、待ちに待ちし援軍は咫尺の地に在るも見へず、其アブ、クリアに於ける戰勝はマーヂをしてカルツームの攻擊を急がしめ、時は一月二十六日の未明、闇に乘じてブレー、メサラミー兩門に押寄せたるも食に餓へ氣に飢へたる半死半生の守兵は敵の眼前に迫れるを夢にも知らず、寄手は得たりと東西一時に起つて魚貫して守備線に迫りぬ、之に驚ろきし守兵が蹌踉めき立つて銃をとる暇もあらせず、敵軍殺到して壘内に突入しぬ、多少の抵抗を爲せしはメサラミー門を守りしイブラヒム、ベイとブレー門を固めたるベトラキーのみ、此二面の兵も須臾にして敵に屠殺され、一たび壘内に入れば全市は早や手中の物たり、逃ぐるを追ひ當るをば殺しつゝ勢ひに乘じて總督府門前に至れば天將に明けんとす、嗚呼マーヂの軍は既に將軍咫尺の地に迫れり、將軍果して何處に在りし乎、現總督の著書『マヂズム史』は最も正確に此間の消息を傳ふるものと信ずるを得べし、總督自らカルツームの巨商にして久しく軍糧を將軍に供して將軍に親炙し後マーヂの捕虜となりしも幸に其一女の彼の意中に落つるあり、之が爲め危き一命を拾ひ得たるのみならず、マーヂの消息細大を知悉し得たるボルダニー、ベイなる者の實歴談を手記せらる、ボルダニー、將軍最後の瞬間に就て語つて曰く、將軍は二十五日の夜半迄机に凭りて何事か書き記したる後僅に蓐に入りしが、寄手の鬨聲に圍からぬ夢を覺ますや、寢衣の儘官邸の

屋根に上り眺望暫くにして東方漸く紅を潮する頃マーヂの大軍既に城中に塡充し官邸見掛けて突過し來るを見られしならん、寄手は邸内に地雷火の布設しあるやに危惧を抱き容易に門内に入らざるを機とし、將軍は靜に己が寢室に退きて白の軍服を着け左手を帶劍に當て右手に短銃を携へ二階左側の階段の下り口に立たれぬ、斯くする間に軍中にても最も勇敢なる四名の兵卒先して邸内に入り數百の蠻兵之に續き、邸内に殘れる番兵使丁の徒多く殺され又は傷きて影を留めず、ダハ、ザヒなる者ドンゴラ人にして其父は余の僕たりしもの先づ階段を上りマラ、オウチル、ヨム、ヨメク(即ち『オー此元兇、汝の死ぬ時は來た』との意)と蠻聲を揚げつゝ莊嚴に而も平氣に神の如くに直立せる將軍の身に長槍の一突を試みたり、次で他の一擊を受け前面に倒るゝや三名は進んで首を打ち落したり、此間僅に數分に過ぎざりしなるべし、將軍は何等抵抗を試みず手にせる短銃より一發をも放たざりしが如し、余

は信ず將軍には苟くも降り若しくは生きんとするの念なかりし、將軍はアラブの迷信的なるを知る、若し自分を虜とせん意志あるを見ば初めて之を用ひんと欲せしなるべし、然も劍と槍とをもて身邊に迫るの彼等を見たるの今は、此杞憂も消へ甘んじて五十二年の生涯を擲つて蠻族の屠るに委しぬ、ゴルドン、パシャの首は直に切取りてオムヅルマンなるマーヂの本營に致され其肢體は階下に驅落され、アラブの軍卒爭ふて之を突き刺して餘憤を洩したりと。

彼れ又曰く余は將軍の首級のオムヅルマン街頭に梟せらるゝを見たるが、此れに石を投じたるは將軍が嘗に其非行を摘發してエル、オベイド警官の職を奪ひたるを後マーヂが用ひて其砲兵隊長とせる男なりしと、或は云ふマーヂは將軍を捕虜とせん意ありしと、而も將軍を屠りし四人の輩の甚だしき懲罰を受けざりしは功罪相償はしめたるの意乎、斯くて英國民の失行を嘆じて『彼等の横道は唯血によりて滌がるゝ

を得べし」と云ひ、『願くば皇天我國民の罪を問はず上帝の怒り偏に基督に隱るる余一人の上に落ちんことを』と祈りしもの、今や罪なきゴルドンの血は罪ある英國民に代つて蘇丹の漠中に濺がれぬ、僅に二日を後れて此地に遣せし援軍の先鋒は其犧牲の生命を救ひ得ざりしのみならず、遺髮の一片だも收むる能はず、生きて名を求めざりし將軍は死して形骸を國民に遺さゞりしなり、前六年、後一年、其愛を吸ひ其苦を吸ひ其勞を吸ひ、果ては其血をも心をも吸ひたる蘇丹の大漠は千載永く其俠骨を含みぬ、余墓に倫敦に在り、マダム、タッソーの階下にて將軍臨終の塲を實物大に生人形として模造せるを見て感慨に打たれたるが、今や親しく將軍臨終の地點に就きて二十有五年前の悲劇を想像し覺へず一掬の熱涙の下るを禁ずる能はざるものあり、誰か余の狂を笑ふものあらんや。

將軍の一生と人格

五十二年の短生涯、弱冠にしてクリミヤ戰爭に從ひ對清英佛聯合軍に從ひ、後、信ぜられて清廷を援けて長髮賊を撃定し常勝軍司令官の驍名を博せしより、或は倫敦郊外グレブセンドの退隱生活、或は赤道州の總督、次て蘇丹本部總督、或は印度太守の秘書官、或は白耳義國王の師、或は清廷に赴きて清露平和の利を說き、或は喜望峰殖民地の軍司令官となり、或は愛蘭に赴きて民情を究め、或はエルサレムの聖地に基督を偲び、終生殆んど寧處せず、生死を度外に置き人の爲めに盡くし國の爲めに盡くし斃れて已まざりし事蹟は悉く之を叙せんには數卷の大冊と爲すべく、其時に應じ事に觸れ、清泉の迸るが如く花香の薫するが如く流露せる人格の高尚、殆んど神の如きに至つては余の欣慕措く能はざる所、偶々携へ來りし蘆花子の日文將軍傳を讀む、正に余の言はんと欲す

る所を盡くせり、請ふ其兩三節を摘出するを許せ、曰く、ゴルドン傳を繙き來りて殊に快よく感ずるは主人公の動機の如何にも淸きに在り、其動機を何處までも押通し往く勇氣に在り、天資潔烈利慾に淡くして義に勇み加ふるに涵養省察の工夫を以てす、其宇宙間に提るゝ所は唯一の上帝、樂む所は人世の爲め力を致すにあるのみ、心に私なく眼に偏僻なく利害に迷はず情實に惑はされず、生を吝まず死を恐れず知己に感じては盡瘁餘力を殘さず、志合はざれば則ち飄然袂を拂つて去る武士と云はゞ眞正の武士、俠と云はゞ眞個の大俠、其の心事去就明々白々、酸素の如く古刀の如く人をして毅然たらしむ、而して此れ皆自然に其天眞の流露せるもの、其間に半點の矯飾を見る能はず、君自天成好男子、何曾一點愛名心とはまさに將軍の眞面目を道破したるものなり、今若し此の婉曲なる世の中を思ふさまに眞直に歩める者あらば將軍は其の一人なり、直進は衝突を豫想す、將軍の一生は滑かなる生涯にあらず、凡

俗は將軍を變物と呼び少狂漢と目せり、輕薄の目に熱誠は變物なり、凡庸の眼に非凡は狂なり、世は道行きに汲々として道路に日を暮らし天才は則ち飛躍して目的に進む、將軍の一生を見るに凡俗が非凡を窘めたるの歴史なり、カルツームの悲劇は凡俗が天才を殺せしものなり、特に其異とすべきは天下攘々利の爲めに來往する今代に在りて殆んど己を忘却せるに在り、その個人にありても己を忘れて人を思へる如く、支那に於て蘇丹に於てその第一に思ふは英國の利益よりも支那人蘇丹人の利益なりき、僞倣なる白人が世界は唯アリヤン人の爲めに存在すと揚言するに引きかへてゴルドンは蘇丹の一布肌を覆はざる土民も己が同胞なるを痛切に感じたり、即ち其の言を引用すれば『此等土族の朦昧無智なる一蠻婦もエリザベス女皇も共に人生の一位を塞く者』として待ちたるなり、蓋しゴルドンの上帝は甚だゴルドンに近かりき、其廣大無邊の光明に照し見れば天に父あり地に同胞あるのみ、常に人

の視力を錯る貧富、貴賤、強弱、國民の隔隙、人種の相違、信仰の相違の如きは殆んど融けて無かりしなり、故に理を見る極て分明なりき、故に能く直往勇進したりき故に能く謙遜なりきと、略將軍の人格を評し盡くせるを思ふ。

將軍駝上の銅像

官邸を辭し將軍の手植せしてふバラの樹の丈け高く伸び百花と共に今を盛りと咲き滿てる(此地の昨今は我が土用の如く日中は室内にて最高華氏九十數度に上るの暑さにて朝夕は意外に凉し、綠樹青草は盲はずもがな總督の邸内は眞に百花爛漫の態なり)遂りを過ぎて副官に別れを告げ、正門を出でゝ數十歩、公園の中央に駱駝に跨り盛裝に土耳其帽(埃及官人の戴くフエッなり)を戴ける將軍の銅像を仰ぐ、此銅像はチャタムに於ける近衛工兵隊本部外に建てられたる銅像の原型なりとの事なるが、痩軀長身遙に南の方無限に展開する蘇丹の沙漠を眺めつゝある所、溫乎たる其容、些個の愁色なし、將軍の死はその屢々洩らせる如く生の苦より樂んで死の天國に赴きしものか、試みに東方の孤客が萬里の絶域に來り己が欣慕する英雄の像下に佇立せし時の光景を想像せよ、駄首固より句を爲さゞるも、咄嗟に沈吟せざる能はざりき、

腔裏所存只一誠　乾坤無往不朋盟
曾經絶漠治蠻貊　又討太平救弱濟(太平則長髮賊也)
重望不辭帝者師　知音何厭祕書名
高風如此眞堪喜　像下徒徊難去情

既に將軍の住みし官邸を見將軍の死せし所を弔ひ、將軍手植のバラを賞し將軍の生けるが如き像に接して興奮禁せず、驢背に跨りて獨り蓋世の歌を高吟し往來の人を驚かしつゝ郊外に古墨の跡を檢し、遠く兩河合流の邊に至りて夕陽の無限の漠中に沒する壯絶凄絶の景に浴し

て歸來、徹宵して將軍の傳を讀みマージの歴史を繙きて感愈々深く、明朝十時を以て會見すべきの旨、副官よりの通知に接し居たるを以て再び總督官邸を訪ふ。

總督ウヰンゲート中將

導かれて階上の事務室に入るに廣大なる一室、三人の祕書官其南隅に椅子を併べ、總督は河に面せる北隅に在り、切りに文書を閲覽せられつゝありたるが、副官に伴はれて入り來りし余を見るや、直に起つて溫顏余を迎へ余に椅子を薦めつゝ相對して坐す、中將が九十五萬平方哩の大領域に總督として又埃及軍の司令長官即ちシルダルとして文武の絶大權能を有するは英、埃領蘇丹の行政組織を見ば直に人の了解し得る所、總督は余の問に答ふるよりも寧ろ自ら云はんと欲するものゝ如く、占領當時の狀況より今日に至る施政の大綱、成績等を詳述せられ且

最近の年報を祕書官に命じて取寄せ一々各項に就て折り紙を挿みて指示せられ之を余に贈らる而も總督の語られし所、報告の示す所は今茲に之を叙するの餘白なし、唯總督は二十五年前ゴルドン救護軍司令官ウースレー元帥の下に一士官たり、越へて十三年蘇丹克復遠征軍司令官キッチナル將軍の下に參謀長たり、克復後直に任命せられたるキッチナル將軍が南亞遠征軍總司令官ロバーツ元帥の參謀長たるの命を受け任を去るや其後任として現職に上り爾來十年間總督の印綬を帶びて暗黑亞非利加に文明を移植し九十五萬平方哩の大地域をして今日の進境に至らしめたるの人、總督は雖人よりも此地の狀況に明かなるの人と云ふを得べく、その語る所は直に信を措くに足る、總督はゴルドンを激賞し其死を痛惜せり、カルツーム間近く迄進みたりしウルソンの一隊が何故に逡巡して急行軍を爲さゞりしか、今も猶遺憾に堪へず、彼れの一隊にして前程を急がば少くとも落城前一日か二日に

カルツームに入りたるべく、彼れの一隊にして入るを得ば落城する氣遣ひなかりしと云へり、ゴルドンの爲す所に必ずしも同意を表せず多少の非難をさへ加へたるクローマー卿も其著に於て『之を要するにグラッドストーン内閣は救援軍を送るに餘りに不決斷なりき、今少しく早く決定せられたらんには此悲劇なかりしなり』と自白せり、余は言はんとす、若し當時の自由黨内閣にしてゴルドンの最初より絶叫せる元の奴隷大王ヅーベルをして蘇丹總督たらしめたらんには同内閣の目的たりし蘇丹引拂を了するを得、ゴルドンを殺さゞりしのみならず救援の一兵をも用ふるを要せざりしなりと、グラッドストーン内閣ゴルドンを殺すと云ふも敢て不可なし、是れ非論の一致せる所、然かもゴルドンはその必ずしも甚だ欲せざりし生を棄てゝ始めて萬古に死せざるの人となれり、此點よりせばグラッドストーン内閣ゴルドンを生かせりと云ふも亦可、何もかも總て命なり天なり、敢て自由黨の大平民を非難すべきに非ず、又世にはゴルドンが工兵出身の築城家にして卓拔なる戰術家たりしに拘らず、何故にカルツームの城壘を改修せず軍糧の準備に疎なりしかを怪しみ且之を議して若し一バーデン、ボーエルをして此地位に在らしむれば必ず落城を見ざりしなるべしと云ふものあり、余は今その是非を分析するを欲せず、假令或者の言ふが如く幸に落城せずして救援軍の到着を見、ゴルドンは其生命を全ふし得、マーヂの軍を討滅し得たりと假定せば其結果は如何、元來の目的が蘇丹引拂に在る以上、前六年間にゴルドンが心血を濺ぎたる蘇丹の地は之をヅーベルの輩カリファの徒に委して遠く北緯二十度以北の地に引下るが落ちならずや、誰れか當時に於て十有三年後の蘇丹再征を豫想する者ぞ、何事も時の勢なり、落城の可否の如き抑も末のみ、然も生來未だ件て二言なかりしゴルドンが『英人來』の語は其生前に於て實現を見ざりしも十三年後に至りて事實となりて顯れぬ、ゴルドンは遂に二言

せざりしなり、十三年後の蘇丹克復軍の大將は誰ぞ、ゴルドン不死の魂を弔ひしは誰ぞ。云はでも人の知るキッチヤル其人なり、而して余の對坐しつゝある現總督も亦其人なり是に於て一言キッチヤルに言及せざるべからず。

ゴルドンとキッチヤル

キッチヤル將軍は余のカイロに入りし翌日を以て溯江し余に先づ一週間にして此地に入り總督の賓客として此官邸に在りしが數日前上流に出獵し明後日を以て一旦カルツームに歸り更にゴンドコロを經てツキクトリア湖畔に向つて長征の途に上る筈なり、キッチヤルは最もゴルドンを崇敬したり、千八百九十八年九月四日彼がカリフアの軍を壓殺しカルツームに入つて英埃兩國の國旗をゴルドンの住み且斃れし總督官邸に樹つるや、即日を以て市中市外のあらゆる僧侶を召集し其軍隊と共にゴルドンの死せし所に於て大追弔祭を行ひゴルドンの舊居の破れたる壁の間より『ゴッド、セーブ、ゼ、キング』の樂聲間へ、ゴルドンの甥の艦長たる一砲艦より弔砲を發するや、昨日まで千軍萬馬の間に往來し血の海を渡り來りたる數千百の壯夫も誰一人として襟を濕さゞるはなかりしとは總督の余に語る所なり、斯くてゴルドンを崇敬するキッチヤルはゴルドンの弔合戰を爲し、ゴルドンの治めたる蘇丹の漠域に其後任として總督の任に就きたるなり、彼は正しくゴルドンの第一後繼者にしてウヨンゲートは正しく第二後繼者なりと謂ふ可し。

ゴルドンを惜しみゴルドンを愛するもの獨りキッチヤル一人のみならず、全英國人皆然り、世界の人多く然り、カルツーム落城ゴルドン行方不明の報初めて英國に傳はるや舉國震駭し國民の心痛は落膽となり悲哀となり、延て遠征軍に對する不滿となりグラッドストーン內閣に

對する攻擊の聲となり、六十餘年の長き公生涯に如何なる大事件に會するも寢室に入るや死魚の如く熟睡すと誇稱したる一世の大平民老偉人をして數宵の間終に眠る能はざらしめたり、蘇丹の救援に斃れし其人を惜むの感情は英國の上下を通じ、また新紙を讀む程の世界の人を通じて皆一轍に出でしめたり、記念碑も數多建てられたる中に尤もゴルドンの意を得べく思はるゝはグレブセンド貧民救助資金及び國立ゴルドン記念育兒院の創立ならん、之が爲め倫敦府知事の手許に醵集されたる捐金二十萬圓以上に及び故清國西太后、李鴻章の名も固より寄附者の中に見へたりと云ふ、然もキッチヂルは最もゴルドンを痛り惜するの資格を有する重なる一人なり、彼が發起したる記念のゴルドン學校は百三十五萬千三百二十圓の寄附金を得、宏大なる地域を劃し巨然たる校舍附屬舍を建設し、一年の經常費二十一萬圓(昨年度)に上り、内十四萬圓は政府之を補助し殘額は學校の收入にて塡補し各種の科目を教授し、生徒の數五百餘、總督府教育局長カリー校長を兼攝し階上の一部を以て教育局とし正しく蘇丹教育の中樞たり、キッチヂル今回の來遊に就ては或はゴルストに代つて埃及太守たるべしと云ひ、或は强壓政策を取らん爲めの下檢査に派遣されたるものなるべしと云ひ、曰く何、曰く何と諸說紛々たり、恐らく日本にも電報にて種々の報導傳はり居ることならん、余は出先きに在り何等の眞消息を知らざるも余の推する所にては唯の私人としての漫遊に過ぎざるべし、而して設立以來未だ一見の機なかりし此學校を訪ひ曾て克復せし新版圖の山川に親しみ兼てゴルドンを再弔せんが爲めなりと云ふを以て至當とせん、カルツームのロードたる將軍は此地とは切つても切れぬ緣あるなり、久振りに此地に遊び萬感の心頭に湧起するものあらん。

總督に辭し總督自署の紹介狀を携へて青ナイルの上流官邸を距る數町の河岸にゴルドン、カレッジを訪ひ敎育局長カリーと會し十年間に於ける彼の經驗談を聞き必要の參考材料を得、導かれて各部を巡視す、官吏及敎員養成部に測量部に中學部に木工部に冶金部に機械部に各部を分ち又化學實驗部あり博物館準備部あり、其れ〳〵擔當者の下に經營せられつゝあり、土民智識の程度は固より未だ高等敎育を施すの域に達せず、我中學の四年級位が最高にして力めて實業敎育に重きを置きつゝあるは至當の事なり、測量部に至り見るに四年生の一團が英語を以てカルツーム鐵橋の圖案を製しつゝあり、受持敎員に聞くに矢張りアラブ族は黑奴よりも頭腦發達せるも黑奴とて全く棄てたものに非ずと云へり、黑奴の畫ける圖案も相當の成績なるを認めたり、敎員養成部の最高級即ち第五年級に至り見るに今や回敎法律の口授中なりしが、試みに『日本とは如何なる國なるや何れにあるや』と問ひしに、

彼等は一齊に(總生徒十數人大半はアラブ族と黑奴なり)擧手せり、擧手せるは我小學校に於けると同樣『知れり』の記しなり、彼等は又日露戰爭の事を知り旅順口を知り浦鹽を知り對馬の海戰を知れり、對馬大海戰に於ける日本の名提督は誰なりしやとの敎師の質問に一人答へて、曰く『トーゴー』と、亞非利加のクロンボも今や我東鄕大將の名を知れるなり、翌にカイロのアヅハル大學の一老書生に聞きて日本の何れなるやを知らず、余を瓜哇人と見誤りたるに比し流石は新敎育を受けたるクロンボ明白に我帝國の地位を解せるを喜ばし、其れより實驗室を見る案內のカリー云ふ、カルツームには モスキトーなきに非ずやと問に實驗部の功を誇るが如しげに余はカイロにては夜蚊帳を用ひしも此地にては之を用ひず、是れ政府の之に對する嚴重なる撲滅策効を奏せし爲めなり、恐ろしき睡眠病もモスキトーより來る激烈なる熱病も此地には其跡を絕てり、更に木工、冶金、機械等の諸部は別棟に在り、既に

此等實業部に在るの生徒百七十七名クロンボも多く、熱心に作業しつゝあるを見たり、生徒の校内に寄宿せるものも亦多く此等には立派なる設備を與へ、年に百五十圓の費を父兄より徵すと云へり、卒業生にして電信技手たり、小學教員たり、書記たり其他各般の事業に從事せるものの成績を聞くに總して好成績を示しつゝありと、生徒の九割以上は勿論マホメダンなるも蘇丹人は概して埃及人よりも溫順なりと聞く、此れやがて埃及と蘇丹との政治の難易を示すもの、之に就ては余の云はんとする所多きも今は言ふべき時に非ず、余はキッチネルの發起したる此學校の大なる成績を示し暗黑蘇丹に文明の曙光を放ちつゝあるを見て地下のゴルドンの如何に我意を得たるかを喜びつゝあるべしと云ふを以て滿足せん。

ゴルドンの遺物

ゴルドン學校は實にゴルドンに取り最大の好記念にして慰藉なり、斯くてカルツームに於ける將軍の遺跡、記念物を巡視し盡くしたる余は昨日午前八時半ホテルを發し昨年我邦に來遊したることあるスコットランド人父子と共に對岸のオムヅルマンに赴きマーヂの遺址カリフアの家、堡壘、牢獄、禮拜堂、奴隷賣買市場、バザール、兵器庫等を仔細に視察したるがマーヂ及カリフア時代の兵器庫は今や政府の倉庫となれり、就て一覽するにマーヂがビックス將軍の大兵を鏖殺して分捕りたる短銃、小銃等の類は固より、ゴルドン死後總督官邸より分捕し來りたる將軍自用の馬車あり、諸器械あり、又將軍愛用のピアノあり陣中の寂寞に堪へざる時此ピアノを彈じたりと聞く、カリフアの家に至り見るに其浴室に今も猶其儘に備附けある黃銅の水管洗面器等あり、將軍の官邸より奪ひ來りしもの、マーヂの死に次で蘇丹王となりたるカリフアはバガラ族にして所謂クロンボの遊牧民たり、天幕生活を爲し來り

しもの一朝帝王の權力を握り十三年の新帝國を創むるや捕虜とせし白人の輩を使役して此家を建築したるなり浴室に隣れる一室の梁は鐵製なりし、是も官邸より奪ひ來りたるもの、戸障子の類皆然らざるなし、屋上に登るに方二三町に亘る廣庭あり、高壁を繞らし眼下にスラーチン、パシャ(英太利人にして久しく彼に因はれ自らマホメダンに改宗せしと稱して毎日數回の祈禱をなし苦役十年幸に命を全ふし今は英國陸軍少將として蘇丹のインスペクトル、ゼネラルの官に至り、現に上流を巡視して此人に會し得ざるは遺憾なり)を幽したる牢屋を始めとしマーヂの墳墓あり全市一望の中に在り又遙かにカルツームの總督官邸を想見すべし、カリフアは常に此高臺に上りて關練を檢し、スラチン以下の白人囚徒の狀況を監せしと云ふ、案内のアラブ人はキッチヂル軍の此地占領當時十八歳の青年なりしが手甲に一彈を被りしも幸ひに命を全ふして難をワヂ、ハルフアに避け得たりとて切りに當年の

狀況を語りて余等をして一層の感を惹かしめたり、斯くオムヅルマンにある將軍の遺物は悉く涙の種なり。

特にホテル門前よりオムヅルマン上陸場迄約二哩の間ナイルの水を往復せし小蒸氣船は名をタハラと呼ぶ、タハラとは蘇丹土語にて清潔を意味す、元ゴルドンの使用せしものにしてカルツーム沒落後マーヂの手に歸するや部下の輩、異人の使用せしものは不潔なり燒棄すべしと唱へし者ありしも、彼れマーヂは『否とよ、異人は不潔なるも名は正しくタハラなり(清潔なり)宜しく使用すべし』と宣し之を河上に浮べ居たるが天運循還、再びゴルドンの國人の手に歸し今は政府の所有となれりとの因緣話を聞くに及んで感慨更に深きを覺ゆ、長江の流を上下してカルツーム、オムヅルマン兩市を遠望し彼此を回想するの所、身も心もゴルドンと同化し去るの感あり、歸りの船中、甲板上より遙に南に向つて無限に展開せる大漠を望み一縷の紫煙の彼方の空に消へ往くを

見る、コハ一週一回此地より旅客を乘せて白ナイルの上流セナールに赴くの汽船たり、ゴルドンが最初に赤道州總督となりて經營したる南蘇丹の當時の首都は此を距る更に一千百三十一哩の上流たるゴンドコロたり、彼れはゴンドコロを中心として赤道直下の瘴癘の裡に東奔西走其心血を枯らし盡したり、其幕僚或は死し或は病の爲めに去り、カイロを距る約三千哩の上流なる自己の本營に在るの歐人とては一土木技師ケンプを殘せるのみ、幸に彼れは不斷の活動を爲して精神の寂寥を慰し手づから一種の藥劑を發明して肉體の病を防ぎ『悲哀若しくは避く可からずんば余は懶惰に費す生活よりも寧ろ悲哀の生活を採らん』と云ひ、『今は此世界に一物として余の貴重する物なし、世間の榮譽乎、是れ虛僞のみ、世間の財物か是れ亡び易き無用の物のみ、余が生活する限り余は上帝の恩賜……健康を貴重す、已に健康を有せば此世界にありては是れ已に富めるなり』と述懷したる彼方の空は直に南に向つて溯航せば汽船にて十四日間の後に到着するを得ると思へば此れ亦ゴルドン聯想の種なり、蘇丹の首都は英人苟もすれば文學的に之を呼んでシチー、オブ、ゴルドンと云ふ、げにカルツームはゴルドンの市なり感慨豈に滋からざるを得んや、ゴルドンに就き言はんと欲するの材料は既に余の腦中に山積す、此記筆を今夜の八時に染め始め書して茲に至り時計を檢するに正に午前三時、起つて戸外に出で河畔を逍遙すれば氣澄みて想愈々湧くも、明日は明日の仕事あり眠らざるべからず、乃ち蓐に就く。

埃及と蘇丹

正月九日紅海南航のアフリカ號船室にて

三十年と十二年の國＝埃及は借家＝蘇丹は持家＝パクシシュ
拒絶の命令＝十五箇國の同意＝ゴルストの報告＝將來は如何

三十年と十二年の國

七日朝八時蘇士を拔錨したる埃國ロイド會社の汽船アフリカ號は航行七百餘哩紅海の中央に在り、風輕く海穩かに舷頭長椅に凭り西望すれば今や埃及を過ぎ蘇丹に沿ふて南下しつゝあるが如し、此に於て心頭に浮ぶは埃及と蘇丹の比較なり、余昨夏佛領北亞非利加に遊びアルセリヤとチユニスを比較して八十年と三十年の國と云へり、埃及は土耳其の朝貢國にして三十年來英の占領に歸せるもの、蘇丹は英、埃兩國々旗の下に立つと茲に十有二年、アルセリヤが佛の一州にしてチユニスが佛の保護國たると固と同じからざるも、尊しく北亞非利加に在りて英の實際的治下に立つもの、埃及をチユニスとし蘇丹をアルセリヤとし、以て三十年と十二年の國と云はゞ云はれざるに非ず、唯經營の歲月に長短の異なるあるのみ、斯くて英佛兩國の成績如何を較するは一段の興味ある問題なるも、そは茲に論ずべきに非ず、今は僅に埃及と蘇丹三十年と十二年の國の比較に筆を染めて閑を消せんとす。

埃及は借家

英人苟もすれば則ち曰く、埃及人は英人を惡むも蘇丹人は英人を好む、蘇丹人は度し易きも埃及人は御し難し、何故に英國は埃及を征服すると佛のチユニスに於ける如くせざりしや、若し埃及を征服したらんには希臘の如き小邦にまで治外法權其他の複雜なる制度を及ぼすの必要もなく、混合裁判所の煩もなく機關も縮小され政費も減少し埃及の

繁榮は今日に倍加するものあらんと、隙を得て獨を望み、喉元過ぎて暑を忘るゝとは此の間なり、英人は如何にして埃及を占領するに至りしか、英人は何等の因緣を埃及に有せしか、英人は一百十年前ネルソンの名に於て曾てナイル河口を占領したるとあり、以て因緣ありと云はんには佛國はナポレオンに依り更に大なる因緣を有す、昔に溯らんか、以太利然り、希臘然り、近世埃及に及んでモハメット、アリーの新建國以來最も助力を受け感化を受けたるは英に非ずして佛なり、言語に文化に風尚に今日も猶佛的勢力は遙に英的勢力の上にあり、然るに何故に英の獨占に歸せしか、云ふ迄もなく英人の巧妙なるに依る、堅忍なるに依る、アラビの兵を擧げて外人を排せんとするや佛人の事に倦んで傍觀の態度を取りしに似ず、英人は兵をアレキサンドリヤに上げ長驅してテル、エル、ケビルの戰ひに於てアラビの軍を敗り茲に獨力占領の第一歩を踏み出せしものにして唯英人の巧妙且堅忍なる能く此機を捉へ

此業を創むるを得たりしなり、斯くて占領したる英人はグレンビル及グラッドストン以來或は公文を以て或は口頭を以て埃及の一時的占領に過ぎずして撤兵の差支なきに至らば喜んで撤退すべきを列國若しくは自國の議會に證言せしこと一再に止まらず、保守黨内閣のサリスベリーさへ明かに公約履行の意思を以てドラモノド、ウォルフをサルタンの朝廷に派し撤兵期に關し協商せしめたることあり、然るに埃及の財政整理其緒に就き之を經營するの自國に利ありて損なきを看取するに及び態度は漸く變じ來り、クローマーの卓越せる手腕は埃及治政の有望なることを本國政府をして確認せしむるに至り、遽の撤兵期の談判の如きは忘れたらんが如く一意經營に其歩を進めしも列國就中佛國の抗議は幾年を經るも止む時なく、漸く千九百四年に至りモロッコ問題と交換的に埃及問題に關し兩國協商を遂ぐる所あり、此協商に依り佛國は英國が埃及の現狀に變更を加へざる限り其占領期に

就き最早故障を入れざることゝなり、英は始めて外患を除きて獨占の時期に達せり、然れども一難僅に去つて一難來る、英は佛と妥協して一息する間もなく內憂は脚下より湧き來つて長へに自ら苦まんとす、アラビの內亂に閉息したりと見へし國民的思想は巧妙なる英人の『民を愚にするの政策』『巧妙なる專制政治』に拘らず、漸次に讀書社會に傳播し、延いて農民學生商賈に及び全土に彌蔓せんとし蘇生し來りたる埃及人は英人に公約の履行を迫りて止まざらんとす、英人既に三十年の新政を布けり、文明を移入せるナイル河畔は最早や骨董の陳列場に非ずして生きたる人間の活劇場たらんとす、斯くて英人の公言し希望したる埃及の平和繁榮の時期は近づきつゝあり、自ら蒔きたる種は自ら刈り取るを至當とす、蘇生し來りたる埃及人が英人の撤退を要求するは理に於て至當とす、公平の意見を有する者は誰人も之に首肯せん、英人は中々に其時期に非ずとし埃及人は其時期に達せりと云ひ、兩々互に見解を異にせり、且や佛は一旦英の要求に聞き妥協を遂げたりと雖も自ら條件的なり、英がナイル河畔の商務を獨占し漸く自己を排し盡さんとするを見ば必ずしも裏心之を快とせざるべく、獨の商權擴張は波斯に容喙せしと同じく此國にも喙を容れずとも限らず、土耳其は固より此國の眞の持主なり、英人に持ち去らるゝを感謝する者に非ず、最も多くの居留民を有する以太利も獨の同盟たる墺匈國も此國に何等の因緣なしと云ふべからず、斯くて外患未だ全く解けざるに內憂は豪雨の如く沛然としてナイル河畔を掃蕩せんとす、英人が埃及を治むるの難き想ふ可からずや、クローマーの此國に鎭する二十有五年其治績擧げて數ふべからず、彼は死せる埃及を蘇生せしめたり、誰れか彼の卓越せる殖民政治家たるを疑ふ者あらんや、唯其れ彼は埃及を蘇生せしめたり、蘇生せしめたるが故に埃及人は現狀を不快とし現狀より脫せんとす、若し英國政府にして疊に歷々公約せし如く埃及より撤退す

るに至らば彼等は何等治政難の聲を發するを要せざるなり、而してクローマーは使命を全ふしたるの政治家として國國の感謝に値するものなり、然れども如何せん英人は長へに此國に臨まんとするが故にクローマーの善政も今日よりせば苦勞の種たるに過ぎざるの觀あり、埃及人の度し難く埃及人の英人を惡むは三十年間に於ける英の治政然らしめたるもの即ち英人の自ら招く所之を歎じ、何故に征服せざりしか抔と云ふは抑も愚なり、之を喩ふれば埃及は借家なり期限附きの借家なり、英人は借手にして埃及人は貸主なり然かも借手と貸主は同居せり借手は期限未だ至らずとて立退きを拒み、貸主は期限既に過ぎたりとて之を迫る、期限は唯强者能く之を定む、借手は依然借家を占領するを得るも貸主の反感は滋々甚だしかるべし、況んや多くの隣人の重寶も借家内に委託し又舊借手の昔を夢むるあるをや、埃及の治め難き言ふを俟たず。

蘇丹は持家

埃及を借家とせば蘇丹は名は英埃共同の持家なるも實は英單獨の持家なり蘇丹は初めモハメット、アリー及び其子孫に依り經略せられたるも、後中絶し、最近十二年前新に英將の下に埃及の兵と金とを以て克復したもの、即ち英の頭と埃の手、足、胴、腹に依りて贏ち得たるもの名をアングロ、エヂプチアン蘇丹と云ひ兩國々旗の下に立つも、努力の分量よりせば埃八分にして英は二分と云ふべく、埃は年々多額の財と多數の命とを犧牲にしつゝあり英は埃の金力にて衣食し埃の人力にて經營を續け來りしもの、過去既に然り將來も亦然らん、故に常理よりせんか英埃領と云ふべく、否な埃及人は埃領たるべきものとし國民黨の如き之を主張しつゝありと雖も、實は英埃領と云ふも名のみにして英領と云ふを當れりとす、英國政府の推薦に依り埃及ケーヂブの任命する

總督は英人ならざるべからず、埃及軍の首腦は總督之を兼ね、政廳の各部長は悉く英人たり、州知事も然り、而して總督は文武の全權を有するに於て英領たらざらんとするも得べからざるなり。

又蘇丹はマーヂ及カリフアの虐政に加ふるに流疫を以てし、曾て八百萬の人口を算せしも一時二百萬に落ち、流離困厄、見る影もなき有樣に在りしが英人來りて新政を布き新文明を入れ、住民始めて其堵に安んじ農牧に從ひ平和の惠に浴するを得るに至る、蘇丹人の英人を好むは其衷心より出づると如何とを問はず、兎に角自然の理なり、虐政を脱し新治を迎ふ、假令ひ胸中に白人我を劣等視すと感ずるも猶之を喜ぶこと早天に雷雨を見るが如きは自然の理なり、且や蘇丹人の大部はマホメダンにしてアラブ族亦尠からざるも其多くはバガラ、セリユク、ヂンガ等の黑色人種にして未だ文化に浴せざる裸體の原始的土族たり、彼等は日に百里を往くの汽車、汽船を見、獅、象、鮫、鰐を屠ること犬を屠るに異らざる白人の武器の精鋭を見、其風采を見、其家族を見、其の爲す所を見て、早く既に其膽を奪はれ白人及ぶべからざるの感を爲す、蘇丹人の度し易きは自然の理なり、例へば埃及は幾人かの手に持廻された手習草紙にして蘇丹は猶新しき白草紙なり、蘇丹の治め易きは自然の理なり。

斯くて英人は一齊に埃及治め難く埃及人不可なりとし、蘇丹治め易く蘇丹人可なりと云ふ、蘇丹政府の教育局長カリー、余に語つて曰く『余は此に在る既に十年黑人の教育に全身を棒げつゝあり、余は此れに滿足す、如何に高祿、高官を以て余を誘ふも余は斷じて埃及官吏たるを欲せず』とカルツーム駐在のプロテスタント派僧正曰く『蘇丹人は埃及人よりも基督教に歸依し易し』と、曾ふの人、語る所の人、多く同一口調に出づ正に事實なるべし、余は埃及の各地を通過し排英熱の意外に熾んにして一人として英の占領に滿足せるものなきに驚きたると同時に蘇

丹の地を踏みて十二年の治政の如何に滿足を蘇丹人に與へつゝある
かを目擊して頗る快感ありたり。

バクシシュ拒絶の命令

埃及を旅行するものゝ不快に堪へざるは一事を命じ一物を託するも必ずバクシシュを與へざるべからず一寺に詣で一院を訪ふもバクシシュを要し、往來に於ても門前に於ても人の過ぐる所忽ちにしてバクシシュの聲あり、五月蠅く身邊を繞ふて數箇の赤錢を投ぜざれば滿足せず、バクシシュとはアラビヤ語にて『施與』を意味し酒錢の事なり、何等の用事をも命ぜざる往來にてバクシシュの話を聞くは『物乞』を意味するなり、余は斯る際にはアラー、バクシシュを繰返して撃退するを常としたり、アラー、バクシシュとはマホメダンの所謂『神が汝に其れを與ふべし』との意にして、此語を連發すれば彼等も閉口して逃げ去ること多し、バクシシュは上は宰相より下窮民に至る迄上下に浸潤せる埃及の一大病弊にしてクローマーは之が矯正に最大の苦心を爲したるは其著に記せる所、中央官吏社會には此弊漸く跡を絶たんとするが如きも地方に於ては此聲猶四圍に滿つ。

然るに愉快に感せしは蘇丹に於けるバクシシュ拒絶の命令なり、蘇士よりポート、スーダンに至る船中、蘇丹官設鐵道の案内記を繙きて其末項に『蘇丹に旅行するの客は彼等の致せし勞力に對し相當の報酬を與へらるゝ外、決して彼等の申出すバクシシュに耳を傾けざらんことを望む、政府は土人教育の爲め之を旅客に希望するものなり』とし總督の命に依り祕書官長之を署すとあり、既にして上陸して汽車に投ずるに同樣の掲示あり、余は總督と會したる節余の入蘇劈頭の快感は閣下のバクシシュ拒絶の命令なりと語りたるに總督も微笑を以て之を受けられたり、一事が萬事なり、蘇丹は猶白紙なり縱横に計畫し、理想の實行

を試むるを得るも埃及は然かく容易なる能はざるなり。

十五箇國の同意

ゴルスト最近の施政年報に記して曰く『若し夫れ外人に關係ある司法事務に關しては現に多くの重要なる提案あり、又多年列國の考慮中に屬するもの尠からざるも昨年度(千九百九年)に於て何等記述に値するの成績なかりしを悲しむ、コハ混合制度に何等かの變改を加へんとせば十五箇國の同意を要し、其至難なるヘルクリスの事業なり』と、獨り司法のみならず、新に國債を募らんには委任の範圍以上の額に上れば政府の獨斷專行を允さず、新に課稅を起すこと亦然り、先年埃及大會議はカイロに市制を布くの決議を爲せり、然れども市制を實施するに財源を何れに求むべき、市民に新に課稅せんには關係列國の同意を要す、財源成りて始めて行はるべきも、課稅の方算立たざれば折角の決議も御

流れとなるを免れず、現にカイロには未だ市制の實施を見ざるなり、一事が萬事なり、埃及の治め難き世人想像の上に在りと云ふべし。

ゴルストの報告

故にゴルストは最近報告の埃及の部に於て一般の狀況を叙し、困難の數々を擧げたる後に結論して『埃及經營の任に在る英人は忍耐を第一の要素とす、忍耐して諦解の去るの時を待つを要す、斯くて歐人も埃及人も社會の各階級が埃及に於ける英國の政治は英國が其勢力の下に置く自餘の諸國に於けると同一の方針、換言すれば其人民の福利を進捗するの外、他意なきを認識するの時を待つを要す』と云ひ頗る悲觀の態あり、此は必ずしも此報告に止まらずクローマーの末政以後、年々の報告皆同一調なり。

然るに彼は同年の報告に蘇丹の狀況を叙し其結論に曰く『蘇丹政府は